改教時報

第百五號

明治三十一年十二月廿六日遞信省第三種郵便物認可
明治三十六年十月八日發行　（毎月一回八日發行）

政教時報第百五號目次

論說

◎求道會館設立の趣旨を披瀝す　故文學士藤井宣正

◎教界振張策　《社說》

◎新聞記者論　一新聞記者

社會

◎獨逸勞働組合の發達　池山榮吉

信界

◎續靜觀錄　文學士近角常觀

▲清澤先生を悼む　文學士藤岡勝二

雜錄

◎五十年の我等　百目木劍虹

◎欲求原理と實在原理　楠龍造

◎佛教信徒の家憲　菊池秀言

文苑

◎大垣藩勤王始末序　文學博士南條碩果

◎秋の嘯　岡しげる

◎秋の句（素水、吟二、曉村）

◎旅行雜吟（臥松）

△新刊紹介▽

報道

◎報道一束　《政教子》

◎龍ヶ崎の二日　劍虹生

◎羽陽の秋　文學士高陽生

◎獨乙より　景山生

▲求道會館設立の趣旨書

大日本佛教徒同盟會綱領

一、佛教本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道德を涵養し品性を陶冶する事。

二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。

三、佛教護持の責任を全ふし健全なる宗教界を形作る事。

四、各宗僧侶を奬勵し、其學德を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。

五、公認教制度を調査する事。

六、社會問題を講究して、慈善事業を起し社會の改善を企圖する事。

七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を奬勵して、善良なる家庭を形作らしめ又社交を融和せしむる事。

八、積極的方針を取り、實業道德を鼓舞する事。

九、教會の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。

十、社會に於ける一切の迷信を勵絕する事。

十一、殖民傳道を奬勵する事。

十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光發せしむる策を講する事。

政教時報　第百五號　十月八日發行

求道會館設立の趣旨を披瀝す

吾人自ら揣らず、茲に求道會館設立の趣旨を披瀝して、世上同憂諸士の贊助を仰ぐ所あらむとす。抑々吾人の此微意を懷抱する、一日の事にあらず。而して屢々之を世上に公表せむと欲せしこと亦一再に止らず。然れども其事業の神聖なるを感じ、自己の修養の不足なるを顧るに至りてや、每に忸怩として口を噤し、筆を投ずるに至りぬ。況んや信念の源泉より涌出する淨財の喜捨を請ふに至りては、滴々皆是れ佛陀白毫の恩賜たらざるはなし。豈普通の經營建設の念を以て起つべけむや。故に吾人、既に業に先輩及親友の贊助を被りて、懲慂到らざるなく、又各地同憂の諸士に對して吾人が胸臆を披き、滿腔の同情を被れるにも拘はらず、遂に之か發表を遲くするに至りぬ。然るに實際上の需要は日一日切迫し來りて、今や吾人修養の不足なるの故を以て之を緩ふすべきの時にあらず、況んや固と是れ自ら道を求め且つ道を求むるの人と其樂を同ふせむとする者、至誠佛天に誓て之か經營に盡瘁する亦是れ道を求むるの一手段たるに於てをや。此に於てをや、吾人斷々乎として年來胸中に懷抱する所を披瀝して、謹て江湖幾多同憂諸氏の贊助を請ふ所あらむとす。

回顧せば去る明治三十三年東京本郷區森川町に一家屋を得たり。地高燥にして氣清く、構造亦寄宿舍に充つるに適す。且つ是帝國大學及び高等學校の中央に位して四方學生の輻輳する所たり。清澤滿之師親しく之を統督して、學生數名と共に同居し、常に寢食を同しくし、日夜心靈の修養を事とせらる。師は實に言はずして行ひ、心を以て人を帥る、古の所謂諄々人を誨へて倦まざりし人也。學生數名常に外より來りて師の教を受く。師乃ち此等の道を求むるの人に對して日曜每に親しく講話を授く。當初僅かに數名に過ぎざりしが、漸次翕然として集り來り時として室に溢るゝに至れり。名つけて精神講話と云ふ。蓋し東都教界中に於て新光明を發揮したる者實に師の賜也。予昨年三月晦朝したるの際、清澤師は親しく予に其跡を讓りて寄宿を經營し、講話を繼續せしめらる。實に是れ求道學舍及ひ日曜講話の起源也。爾來既に一年有餘時勢の要求は益々求道の士を驅りて門前踵を接せしむ。而して師や既に空しく靈界の人となり玉ひぬ。今や滿天の秋氣、

先生曾住の室にありて筆を取る、實に追懷悽愴の感なくむはあらざる也。

抑々求道學舍の目は之を無量壽經の文句に基く所也。曰く「爾時、世自在王佛。其高明志願の深廣なるを知ろしめして、卽ち法藏比丘の爲めに、經を說きて言はく、譬へは大海を一人升量せんに、劫數を經歷して、尙底を窮めて、其妙寶を得べきが如し。人至心にして、精進にして、道を求めて止まざるあらば、會、當さに尅果すべし、何れの願をか得ざらむ」と。蓋し求道の目は佛經到る處に存すと雖、特に此文を一瞥したりし時に、吾人は佛陀無限の救濟力の吾人の頭上に下れるを感じたりき。嗚呼佛陀は此の如き堪忍不拔の大精神を以て遂に理想の淸淨國を出現し玉へり。安靜の樂土を莊嚴し玉へり。實に是れ吾人永久の安所にして光明の世界なり。冀くは吾人は此光明に攝取せられて、此理想の像を吾人社會の生活の上に實現せむと欲する實に吾人の至願也。

人言ふは安くして行ふは難し。殊に人生生活の上に理想を實現する最も至難とする所也。今や、社會的問題は將來の一大難關として解決を促し來る所。吾人冀くは內心の安慰を以て平和の根底となし、信仰の威力を以て幾多の艱難に打勝ちて僅かに佛陀冥眦の下に肅々てとし自ら謹み、且つ同好の學生諸氏と共に生活を同くし、修養に勉むることを得ば吾人の志幾分か酬ひたりと謂ふべきか。是學舍を名くるに求道を以てする所以。唯文字の如く眞摯に道を求め、佛陀救濟の靈光に沐浴して生活を營むを得は實に吾人無上の幸福也。是吾人か特に求道の切實なる人々を寄宿せしめて生活を共にせむと欲するの微志也。

特に近時最も學生青年の間に於て、其風潮を高め來りたるは內心に於ける安心修養の問題なりとす。吾人は胸中煩悶を抱ける同胞に對して實に全身の同情を寄するもの也。蓋し煩悶なるものは煩悶せむと欲して煩悶するものにあらず、又之を遣らむと欲して遣り得べきものにもあらず、之を治する唯獨り佛陀慈愛の救濟力あるのみ、佛陀靈光の攝取あるのみ。吾人は彼の滿腔の悲哀、欝々として解けず、悶々として苦しみ、天を仰きて嘆き、頭を垂れて涙潸然たるものあるに至りては、吾人實に之を凝視するに忍びざる也。吾人は白狀す。吾人は實に煩悶の苦を嘗めたる也。沈欝の實驗を經たるもの也、若し不幸にして吾人佛陀慈愛の光明に接觸することなかりせば、吾人亦其運命の如何なりしかを知る能はず。吾人昔日の境遇を回顧し來りて自ら竦然として心を寒からしむるものあり。幸に佛陀慈愛の救濟力在せり、冀くは世の苦める者、共に手を携へて其淸懷に眠らむ哉。吾人現時固より煩悶なきにあらず。苦惱起らざるにあらず。唯其起るや、煙霞の曉天に横ふが如し。雲霧の月明を遮るが如し。幸に無限の慈光は迷蒙を破りて淸淨の天地を開闢し來る。吾人敢て獨り斯道を私

するに忍びむや。唯事實驗を披瀝して心琴の共鳴に訴へ、所感を傾けて內心の懺悔を事とせむと欲するのみ、此に於て日曜講話を開きて、淸閑半日、來會求道の諸氏と共に甘露の法雨に浴し、內心煩悶の餘を消滅して共に光風霽月の天地に遊ばむことを樂む。實に是れ人世の最大幸福にあらずや。多生の大事因緣にあらずや。經に曰く。壽命甚だ得難く、佛世亦値ふこと難し。人信懸あること難し。若し聞かば精進にして求めよ、法を聞きて能く忘れず、見て敬ひ得て大に慶ばゝ、則ち我善き親しき友也。是故に當さに意を發すべし。設ひ世界に滿てらん火をも、必す過ぎて要めて法を聞かば、會す當さに佛の道を成し、廣く生死の流を渡るべし」と。豈是求道者の句々味ふべき訓戒にあらずや。

吾人は實に此の如きの意味を以て求道學舍を設立せり。吾人は此の如きの精神を以て日曜講話を開莚せり。日曜講話は本年夏期傳道の間を除くの外は、昨年已來一日も廢したることなし。特に毎月第四の日曜日には講話後に於て信仰談話會を開き、來會者團欒して膝を交へて、各其所信を披き、靈感を語りて共に相互の修養に供す。吾人は現時如何に靑年が內心修養の問題に向て心血を注ぎつゝあるかに感するもの也。開會已來眞摯道を求むるの人々は常に室に滿ちて、所謂立錐の餘地なきに至る。抑々講話を開くの室は平常吾人の住居するの居間二室を以て之に充つゝ爲めに狹隘を訴ふる固より其所なりと雖、常に障を撤し、椽に溢れ、坐するに所なく、甚しきは襖を隔てゝ聞き、庭に佇立せざる可からざるに至る。近時遂に止むを得ず、壁を壞ちて猶他の一室と連絡せしめ、以て一時の救を救はむとす。然れども是亦僅かに其需要の一部を充たすのみにして、大體に於て現代切實なる求道の人々をして滿足せしむる能はざる明らか也。殊に冬季の如きに至りてや、亦如何とも爲すべからず、吾人洵に以て憾と爲す。是止むなく吾人自ら揣らず、求道會館の設立を發起して、先輩親友諸氏の指導を仰きて江湖同憂諸氏の贊助を求むる所以也。

現時求道者の熱心なる決して日曜講話のみに止らざる也。個人として來訪して其所信を披瀝する人あり、年來解けざる疑を質す人あり、境遇より釀成せる苦悶を訴ふる人あり、又團體として夜會を催ふして相互の修養に供するあり、書信を以て其信仰を表白する人あり。最も眞面目に至りては公に懺悔して胸中の淸楚人をして欣慕措く能はざらしむるものあり。飽くまで胸臆を暴露して熱情人をして感激止むべかざるものあり。吾人は實に現代思想界の潮流決して偶然ならざるを知る。吾人は思考す、吾人の社會は猶深く人生を實驗すべき運命を有せり、吾人國民は非常なる艱難に打勝つへき時運に膺れり、將來社會の激浪益々高くして益々內心的光明の發揮を要し、慘憺たる風雨愈々烈しくして愈々精神的威力の鍛

練を要す。嗤世の苦悶者に安慰を與へ、求道者に救濟の光明を與ふるを要する、蓋し今後益々急を訴へ來らむのみ、此に先つ求道會館を設立して、此般の精神的需要に應するの施設を開くの端緒たらしめむと欲する也。

從來帝國の首都に於て佛教徒に屬する會館の設あることなく、爲めに其不便を感ずること一日の事にあらず、回顧せは大日本佛教青年會の組織せられたるや、實に今より十二年前の事に屬す。吾人當時學生間に於ける會盟を回想する毎に、一種森嚴の靈氣を感せずむはあらざる也。而して帝都の中央に於て會堂を建設して、以て清新なる氣運の中樞に充てむと欲せしこと實に其宿望たりき。而して其計畫屢々進みて、而して未だ實行の緒に就かず、事頗る遺憾に屬す。然れども畢竟是其規模の大にして且つ佛教各派の統一を要せるが爲めのみ。蓋し他日大成の時機を期して可也、吾人去る明治三十三年歐米に航して親しく泰西の宗教界を觀察し、特に近時社會的經營につきて調査する所あり。彼の基督教青年會の如きは年來最も之を調査せむと欲せし所。シカゴ紐育を初めとして米國諸市到る所之を視察し、特に倫敦ストランドの中央本部に至りて十分に之を視察せり。其會堂を初めとして教育、体育、社會、宗教の各方面に渉りて其施設の整頓せるを調査して、此等の事業の我國佛教徒の手に成ることを望む實に切也而して吾人が最も感じたるは單に非常なる設備を完成し、年々數千萬圓の寄附金を費して其事業を擴張するの點にあらずして、寧ろ其創立の當時微小なる源泉より流れ來りて遂に此大なる效果を收めたるの點にありとす。見よ、一千八百四十四年創立に際しても、僅かに十二人の青年相會したるなりき。其五十年紀念祭を倫敦ローヤル、アルベルト館に行ひ、萬國全會の名を以て滿堂の青年歡呼の間に半身像を創立者ショージ、ウヰルヤムに贈るや、彼は殆むと涙を以て滿たされつゝ起つて謝して曰く、予は毫も此の如き賜を受くるの價値なし、予は全く了解する能はず、予の事を創むるや何ぞ今日の盛大なるを期せむや、唯志を同ふするもの一小室に會合し、一週僅かに二シルリング六ペンスを拂ひしに過ぎざりしのみ。而して發達せし此の如し、予は徹頭徹尾神祕にして測る可からざる也と、蓋し是れ精神的事業の好模範也。予倫敦中央本部エキゼター、ホールを訪ひたるの時、氏は實に選鑛として猶全國委員會の議長として事務を取り、吾人を見て手を採りて迎へ、我事業を慫慂して措かざりき。吾人感慨無量實に言ふ所を知らざりき。

歸朝已後心を潛めて修養の問題に着手し、心靈の開拓に心を專注せしが、遂に會館の必要は日一日に切迫し來れり。而して是實に佛教者全體に於て各種の方面に於て要求を訴ふる所、茲に吾人は先づ現時の必需に應ずべき程度の會館を設立して佛教全體の需要に供し、且つ集會場を設けて清新なる社

交の中心に充てむと欲する所也。特に現時求道學舍の附近に於て多少の敷地を借り得べき好機あり而して先輩及親友諸氏の懇切なる指導と贊助とを與へらるゝあり。吾人不肖固より此の如き神聖なる事業を發起するの器にあらざるも、求道上、及び社會上の要求實に默過すべからざるものあり。其規模の如き。決して其大なるを期せず、其建築の如き亦高壯を望まず、單に切實なる求道者の焦點となり、且つ佛教者一般需要の急に應ずるを得ば幸之に過ぎむのみ。若し之を以て燎原の一點火となし、此般の事業佛教界に興起し、遂に他日全國佛教青年の中心を東都の中央に實現するを得ば多年の宿志初めて報ずるものと謂ふべし。而して吾人將來必ず、此時期の來らむことを確信して毫も疑はざる者也。冀くは佛天の冥祐吾人の至情を照鑑して前途の光明に導き玉ひ、全國同感同憂の諸士不肖か愚衷を憐みて、協力贊助し玉はむことを。謹て白す。

近角常觀

教界の振張策

故　藤井宣正

佛教内の他宗は聖淨共に今の儘にては遂に日本の社會に適應生存し得へからず、故に其宗派の信徒籍に名を懸くるもの も必すや、他の社會に適應せる宗門に歸向せさるへからず。是蓋自然趨勢なり。故に此機に應當するは吾人の最急務なると同時に、事を行ふに當りて急遽に失せさらんことを勉めさるへからず。然らずんば憤々たる殘餘の他宗僧徒と過度の感受性を有する政府との驚慌反動を起さしめ、爲めに我能力の大部分を割興せさるへからさるに至らん。

他宗の僧侶には改宗せんとする底の信念を有するもの少く、又自宗内には彼等を改宗せしむる底の利福現に存せず、故に強て之を爲さしむるも徒らに煩累を大法に加ふるあるのみ。之に反し其所謂信徒多數の中には信念あり、勇氣あり、又財力あるもの少からず、之を改宗せしめんには大に用ゆ可ものあらんこと必せり。而して此等の徒は今や子弟教育に心を傾け、又漸く倫理道德の問題に意を注くに至れり。是實に投ず可き好機なり、救世の善知識及ひ之を翼贊せんと勉むるものゝ逸すへからさるの時なり。

然れども之を言ふは易く之を行ふは難し。何となれば今の日本は或點に於ては佛教僧侶を僧侶として社會組成の一要素と認めさるが如き觀あり。是其由來する所を繹ぬれば、或は立宗の綱要社會に超越するを本とせるに起因せるもあらん。又數百年の成形容易に故態を變ずる能はす。知らず、識らず、社會の趨勢と歩調を同ふすること能はざりしに由るものもあらん。其原因を何れとするも佛教僧侶か一般社會の以外に措

る、は事實なり。此境遇に處して救世の大事を行はんとは單に口舌の方便にのみ依賴する能はず。說教講話もとより可なり、然れとも彼業は驟雨の一時の蘇息を與ふるに比す可し、遂に根底を潤ほすに至らず、是蓋生を邊土に送りしもの、尤も能く知る所なり。故に今の必要は多數の學者にあらず、多數の智者にあらず、多數の法に忠實なるものを得て、其鄉黨里閭に定住せしめ、各其手腕に應して所在に二諦教旨の事實に就きて宣揚せしむるに在り。

之を言ふは易く是を行はしめんことは難し、故に始より之を行ふ人の多きを望むへからず、行ふことの廣且大なるを望む可からず。今の時は全國小學が有する子弟をして悉く我子弟と爲すを終極の目的とし、先之に趣向する起點を定め、社會改造本旨として、徐ろに之か計を爲すに在り。但始より其事を廣くし、其聲を大にするは策の得たるものにあらず。試に看よ、岡山、王子の孤兒院か現下如何なる勢力を有するかを、彼實に一私人か社會に起りし一現象に就て作爲せるものゝみ、而も起業十年の今日は彼か如く世の耳目を牽くに至りしなり。故に始より多きを望むの要なし。否多きを望むの非なるを了悟せるもの及ひ了悟し得るものをして之を行はしめ、本山之を保護せは足れる也。

小學の現教科程は實に兒童の堪えさる所、早晩之か變更を見るは毫も疑なし、若之か變更に躊躇するあらば相助けて速行せしめさる可からず。而して此變更は所在寺院の住職に兒童教育に干與し得る便宜を供すへし。假令此變更數年の後にありとするも、所在寺院の住侶は小學教育に補助を與へ得ることは易々のみ。敢て日常の法務執行を妨げさるなり。但之を行はしむるに其人を撰はさる可らず、人誰れか少勞多効を望まさらん、之を速得せんとするは人情の常なり。たゞ知識あるものは後れて多く收むること を勉むる故に成効するのみ、先此種の人を撰び少くとも此旨を遵奉履行するものを揀ひて其事に當らしめさるへからず。鄉黨里閭を組成する父兄も少費多果を念とす、然れとも彼等は時に之を口にするを嫌とせず、故に教家は先此點を刺衝することを止め單に子弟の教育事業上に補益を與ふるに勉むべし。是人其撰に當らされば爲し能はさることたり。

小學教育に干與して得る教家の利益の最大なるものは述ふるを要せず。たゞし之に附隨し或は之に先ち收め得らるゝ利益は大凡次の如きものならん。

小學校教員は必すしも皆土着のものにあらず、之に反して教家は土着人なれば、其鄉黨に在りて事を爲さしむるに便あり。

教家か學校教育に戮力するを見は小鄉黨は、法務執行の時間を一定請求するの自覺を生すべし。之に由て遂に說教法話の如きは各級各年齒の男女か悉く參聽し得るの時に行ふことならん。而して僧侶の職は會葬吊慰の讀經と垂死の男女に說法するのみのものにあらさることは事實以て其了解を示すに至らん。

此國も（英國）他歐洲諸國の如く日曜學校を開き耶蘇教的道義を授くること盛なり。是甚た可なり。經驗思想の一ならさる異齡の男女を一場に會して、一齊に之を教訓せんことは法の得たるものにあらず。而して教家小學の教育に干與するに至らは、此日曜學校を開きて教化を與ふることは容易とならん。

斯くの如にして所在の寺院僧侶鄉黨と接近せは、啻に其僧侶は其里閭の牛耳を執り得るのみならず、其寺院は鄉黨の寺院として維持せられ、また之か保持を憂ふる要なき至らん。又之に由て寺院に住する男女も、間接に各自の趣向すへき處を悟了し大に得る處あらん。

今の教家に病む所は忍の欠亡に在り、勇なきか爲めに忍ふ能はす、恰も蠶虫か自ら縛して枯死するに似たり。然れとも之に授くるに法を以てせは、皆悉く蠶兒なるにあらず。之を揀擇し、之を奬勵し、又之を統合するは難きにあらず、策あり、行ひ難きにあらず。試に唐家昌盛の業を見よ、世民齡五十有三、玄武蝶血の慘劇は彼二十九歲の時なり。長きか如くして短きは時間なり。難きか如くにして易すきは事業なり。故に成功は急くへきにあらず。之を急にせは遺算は免かれさるべし、教家既往の事業皆悉く否なるにあらず。而かも概して成功を見るに迨はさるは、他なし之を行ふに其人を得す、之を謀るに未た密ならさるに早く其聲を大にし、由りて以て人目を奪ひ去らんとせるに由らさるもの稀なり。其事其物に不忠實なりしに職由せさるもの少し、之を換言すれは、皆悉く一時に急なるに出てしものなるに由るのみ。十年書を學ひ成らず、去りて劍を學ふ、是尙ほ十年の忍を有せり。以て師とするに足らん。然れとも眞の師は此に在らす、終生その志を變せさるに在り。屢々事を改むるは斷なるか如くにして、實は忍耐持久の精神なきを他に示すに過きす、是蓋救世の大任とせらるゝ宗教家の先其徒弟に誡飭す可き一教條とす。此誡飭にして徒弟に遵奉せられんか、之を外にしては偶以て日本人の欠點に大打擊を與ふるを得ん、之れ豈に眞の宗教家の所爲に當らすと云ふへけんや。

明治三十五年六月十日英國にて　　末弟宣正私に識す

右の一篇は文學士藤井宣正氏の遺稿にして、末尾に「宣正私に識す」とあるか以て猥りに公にすべきにあらされとも。同氏が教界の經營に就て常に其念頭を離れさる憂宗の精神の厚きを思ひては獨り之を誦するに忍びす。乃ち茲に揭けて廣く世に示す所以のもの、一人にても同氏の志氣に感奮して起つものあらんかを思ひて也。

秋十月雨蕭々の夜　　記者識

新聞記者論

一新聞記者

一　軟派記者と硬派記者

新聞記者とは新聞社の編輯員を指す、而して新聞社の編輯部は軟派と硬派とに別たる、軟派は社會の風俗、市井の瑣事を分掌し、硬派は政治、經濟、軍事、農工等を擔任す、前者を名けて三面といひ、後者を呼んで二面といふ、從て前者の記事に預るものを軟派記者若しくは三面記者と稱し、後者の記事に從ふものを硬派記者若しくは二面記者と稱す、更に文學、美術、宗教、或は社會事業に携はるものあれば假に之を中派と名くるも其實硬派に屬せらる、而して論說、時評等は勿論二面の所屬にして、小說、講談は言ふまでもなく三面の所屬なり、二面三面の名はその初め四頁新聞の体裁に於て命名せしところなるが故に、六頁、八頁、乃至十二頁の大新聞に在ては記事の配置必ずしもその名と相副はざるは珍しからずと爲す。

分界此の如く明かなるが故に、編輯局に於ても軟派は硬派と分れて別に一廓を爲し、平常の所談亦同じからず、一方「コロンウエル」を論じ、「ビスマーク」を評されば、他方「セーキスピア」を說き「ゾラ」を談ず、一方滿州問題を講じ、田村怡與造を惜しめば、他方「濱子」を語り、川上音次郎を品評す、內閣大臣の更迭は硬派の一大事件にして、號外を發するやら、社前に張出をなすやらの騷ぎをなせども、軟派は冷然之を過眼して、戀に戲るゝ無智の少年が、妓樓に於ける情死だにも値せざるが如く、而して明治の石川五右衛門、渡邊金兵衛の捕縛は、實に彼等が敏腕を振ひ、才筆を弄するところとす、新聞社に於ける硬軟兩派は宛かも人の男女兩姓の如し、風采異り、衣服異り、希望異り、抱負異り、性格異り、俗に所謂何事にも氣が合はざるなり、然れども此の相反せる兩個の人物相和合するに非ずんば、我邦に於ける今日の新聞は成ること能はず。

三面記者は常に社會の裏面に向て、多く筆を取るが故に、遊治郎、藝人等と近似し、その事情に通じ、その容姿を摸擬し、品性漸く卑く、士人の伍するを快とせざるものを生じ、又其の一面には社會の缺陷を發露し、世人の秘密を摘發し、之を利用して不義の利も貪るものを出す、害や恐るべしと雖、世既に之を知る、只青雲の志盛なる前途多望の少年青年の希望する、硬派所謂二面記者の惡德に至ても、卑しむべき三面記者の害毒と其の甚だ遠からざるものあるは、國家の前途轉た憂ふべきものならずや。

二　論說記者と雜報記者

硬派記者の中には論說記者と雜報記者とあり、元來新聞の

論說は政治、經濟、實業、風教、文學、美術、各般の時事を論議し、世を啓發し、人を指導するものにしあれば、その記者たるものは、よし淺くとも此等各方面に遍通せざるべからず、之を兼ぬることの或は難しとするも、各部に分擔して各々其の受持の部分に向ては相應の有眼者ならざるべからず、而して今の論說記者は如何、堂々たる帝都新聞の論說記者にして、識者をしてその能くなすやを疑はしめざるもの若干ぞ所由もなく閣臣の人物を罵倒し、徒らに內閣の方針を攻擊し、官といへば一も二もなく毒筆を弄し、民といへば何事によらず贊成するは決して天が論說記者に下したる任務にあらず、彼等は政治を知らず、經濟實業を解せず、風教を念とせず。文學美術に盲目なり、積極的の建設論は彼等の力に及はず、即ち常に消極的破壞論を以てその責を塞ぐのみ、往々にして、識學見るべきものあり、文章時に群蒙を啓くものなきに非ずと雖、その人を見んか、その議論を再讀するの勇氣を失はしむるもの比々として皆然り、予豈新聞記者に宗教者の森嚴を望まず、道德家の窮屈を希はず、細節は之を顧みるの要なし、只大義に通ぜんことを欲するのみ、帝都の新聞記者、幾百、而かも陸實、三宅雄二郎、島田三郎兩三氏を除てこの嫌なきもの果して幾人か在る。

然れども論說記者は尙幾分の學問あり、識見あり、品性もまた比較的には卑からずとせん、雜報記者に至ては學問なく、識才なく、文章なく、定見なし、主義や節操や彼等の前には何等の意義をも有せず、只器械的に事實を報道し、反射的に盲動するのみ、彼等は新聞記者の天職を知らず、また新聞記者の神聖を解せず、更にまた新聞記者の趣味を誤認す、その天職を知らざることは宛かも今日幾万の僧侶が、三界の導師たることを忘れて葬式法要の死事を以て能とする如く、その神聖を解せざることは小學敎師が未來の國民を造る大責任者たるを忘却して貨殖の道に急がはしく、物かに高利貸を爲すものさへあるが如く、その趣味を誤認することは、文學者が天地の微妙と合するの趣味を覺らずして、徒らに輕薄才子の戀愛を描て得意たるが如し、新聞記者の實價漸く下り、世人新聞記者と言はずして新聞屋と呼ぶ、蓋し適稱といふべし。

三　內勤記者と外交記者

雜報記者を分て內勤と外交とす、社內に在て編輯の中樞に屬するものは內勤記者にして、政治、經濟、軍事、外交各一部を分掌して車を驅て種を取るものを外交記者といふ、外交記者の貶稱には種取りといふ語あり、然れともこれ餘りに酷稱なり、種取りとは三面の探訪に與へられたる名稱なり、外交記者は如何に無學不文なりと雖、三面探訪の學力程度にてはつとまらず、外交記者に最も必要なる要素は交際の巧なることなり、交際巧ならざれば顏廣からず、顏廣からざれば好箇の種は上がらず、次に必要なるは鉄面なることなり、閣臣の

並ぶ席上にても、國賓を招く宴席にても臆面なく出入するの鉄面を有せざるべからず、次に缺くべからざるは機敏と明察となり、元老の動靜を見て政變の大体を知り、閣臣の消息を探て廟堂の風雲を察する所謂一を聞て十を知るの能なかるべからず、外交記者には又高等探訪といふ名あり、この名尊稱なるや叱稱なるやを知らずと雖、外交記者は單に探訪の能のみを以て足れりとせず、外交記者にはこの外に文章を要す、同一の事實にても面白く讀ますると、平々凡々に看過せしむるとは一に外交記者の筆力如何に依れり、而してその學力の優劣は人をして、談を佳境に進ましめ、或は通り一遍の談話に終らしむるの差異を生ず、新聞社は種を以て生命とす、而してその種は外交記者の供給するところなるが故に、新聞社は外交記者を優待す、今日の狀態にては特別の取調若しくは任務に從事するものゝ外、内勤記者は經驗少き未熟者か若しくは無能の人に止まり、少しく技倆あるものは概ね出てゝ外交記者となる、故にその地位卑きが如くして其の實内勤記者の上にあり、而して世人が認めて硬派新聞記者とし、自らも未た多く新聞記者と吹聽するものは論說記者に非ず、内勤記者に非ずして外交記者に在り、而かも今の外交記者なるものは、外交記者といはんよりは高等探訪若しくは種取りといふの至當なるを感ず。

四　新聞記者の道念

予輩が外交記者を稱して高等探訪若しくは種取りといふの適稱なりといふものは、彼等自からにして高等探訪若しくは種取りを以てその任務と心得居るが故なり、我邦外交記者なるもの千を以て數ふべし、而かも萬世不朽の名文を出して一代の人心を風靡せんとの抱負を有するもの果してあるや否や、何人も之を能くすとは言はじ、只之が抱負は何人も之を有するを得べし、彼等の多くは文を以て世に立つものと考へ居らず、機敏に内閣や政黨の内幕をスッパヌクを以て敏腕なりとす、内に政治上の主義あれば、これによりて筆の進退を定むるを得べし、彼等にはこれなし、心に經濟上の定見あれば、これによりて文を律するを得べし、彼等にはこれなし、文學の事、美術の事、風教の事、凡て盲目なり、彼等は一々に之に迷ふ、茲に於て其の筆の向ふ所、人の秘密に走り、社會の欲陷に入り、知らず〳〵惡德を構成するに至る、而かも彼等は之を恠しまず、外交記者の能事こゝに了れりと爲す、試に諸官省、諸會社に就て之を聞け、一二新聞を除くの外、外交記者なるものが如何に蛇蝎視せらるゝかを、予輩は思ふ、最も社會に親近なるは新聞記者なれば、又最も社會の各部と親愛ならざるべからずと、その今日の如きは一に外交記者の德操欠乏せるによらずんばあらず、世輕薄才子多しと雖、今日の外交記者の如く甚だしきはなかるべく、之を譬ふるに今日の外交記者は、宛かも旗亭に出入する高等密賣淫の如し、

美味に飽き、美衣を纏ひ、高官紳士に接し、而かも一度之に觸るゝもの害毒の身に及ばざるもの甚だ稀なり。若し三面記者を以て墮落文學者とせんか、今日の二面外交記者は疑もなく破落漢政治家、或は壯士とするを待べし、然れどもこれ其の劣等なるものなり、外交記者の全躰が此の如しとは言はず、只この劣等なるもの頗る多きを如何せん、而してその上等なるものに至ても權勢に渴し、聲譽を追ふに急にして、眞個世人を導かんとの至誠、竟に求むべからず、此の如きは抑〻何ぞや、道念の缺乏即是れなり。

五　予輩爲に策を献ず

試に帝都二十有餘の新聞社編輯局に於て宗教を談ぜよ、一言の下、冷笑嘲侮の聲中に葬られて眞面目に耳を假すものはなけん、從て宗教記事の喜ばれざること驚く可く適々之あるも他社の權衡上厄介視せられて漸くに掲載せられたるもの、即ち宗教は未だ社會現象の一と思惟せられざるなり、而かも其の鑑識は一箇の定見より出でたるに非ずして、宗教の事は變化なく、活動に乏しく、記事面白からず、讀者に歡迎せられずといふより割出せる論法なり。識者より見れば淺薄極まる議論なれども、教育の事すら面白からずといふ單純の理由の下に、深く着目せられざる今日の新聞社に於ては誠に無理ならぬことゝいふべし。而してこれ遠く今日の外交記者が種取りに陷り、今日の新聞記者が新聞屋と侮蔑せらるゝまでに墮落したる源因なり、全國の新聞記者幾千人、能く宗教を味ひ、修養に志あるもの果して何人かある、予輩必ずしも新聞記者に向て未來宗教の信者たれといはず、更に又多くの外交記者に向て必ずしも宗教を信ぜよといはず、只自己を律し、自己を高むるの道念を養はんことを勸告す、而してその道念は何によつて養ひ來たる、人に宗教の志なく、修養の精神なきは、即ち人格下落し、品性野卑となり、只物質的實利の一方にのみ偏する墮落の徑路によるものなり、社會の木鐸となり、風教の指導者たる新聞記者たるもの深く思を致さゞるべけんや、茲に於て予輩は有眼なる宗教者に望む、學生を集め、紳士を集め、婦人を集め、小兒を集めて教を傳へる、人々をして安慰に導くと共に、社會改良の上に大なる貢献あるべしと雖、新聞記者を集めて道を說くの、更に有功なるを思ふて、直ちにこれが實行の途に就かれんことを。

更に又一策あり、今日の新聞記者の墮落は生計の困難なること確かにその主因なり、何人か好んで卑野なる行動を爲し、好んで陋劣なる言行を敢てするものぞ、武士は食はねど高揚枝といへども、今日の新聞記者は士人を以て高く居るものに非ず、誘因あれば奈落の底までも沈淪せずんば止まざるものなり、衣食足て禮節を知るの眞理なるを覺らば、食ふや食はずのものに道念の如何を追求するの、酷ならざるには非ず、然れども由來新聞社は營利を目的として成立し得べき業にあ

らず、萬朝報の如き成功せしものは稀に見るところにして、目下都下に於ける新聞紙中發賣第一と稱せらるゝ二六新報すら、何等がの輔助ありと傳へらるゝに非ずや、此の如き新聞社にして多數の記者に官給相當の高給を給することは、到底議すべくして行はれ得べしとも思はれず、こゝに於て予輩は政府が嘗て華族中の俊秀に外交官を志願せしむる方針を取りたる如く、新聞記者も亦裕福なる華族を以てせんことを献策す、此の如くせば交際も十分に爲し得べく、官民共に信を置くことも多かるべく、而して道念の修養に怠らずんば、まことに美き新聞記者を得べし、以て初めて新聞記者の品位を高むべく、亦以て華族の遊惰を防ぐに足るべし、敢て勸む。

（完）

獨逸勞働組合の發達（中）

池山榮吉

二　社會主義勞働組合

◎前號に述べた通り、『進歩主義勞働組合』は、大体に於て順勢の發達を爲したるに反し、『社會主義勞働組合』は、幾多著大の變遷を經べき運命を有つて居つた、千八百六十八年九月、ラッサル派社會黨の總理シュワイツァーが、伯林に招集せる獨逸勞働者大會には、百十箇所の勞働者無慮十四万餘人の代表者たる、二百六人が相會して、各種職業に依つて分別された、三十二の勞働組合を以て構成さるべき、『獨乙勞働組合同盟』の成立を議定し、尚ほ進んで其席上に於て、直ちに十の勞働組合を組織した、といふ最と目覺ましき盛況を呈したるにも拘はらず、亦後の發達は始めの脱兎の勢に似ず、處女の如き終りを告ぐることゝなつた。即翌千八百六十九年、カッセルに開きたる大會に於て代表された勞働者の員數は、前回の約四分の一、三万五千餘人に過ぎなかつた、而して此會に於てシュワイツァーが、自から發議して同盟を解散し、更に『獨乙勞働者保護會』なるものを組織し、是迄勞働組合に加入せる者を、悉くその會員たらしめ樣としたが、抑も該會の組織たるや、各種職業の異同を問はず、從て利害の關係を同うせざる一般の勞働者を網羅せんとするもので、勞働組合の第一義たる、組合員の利害共同といふ地盤を欠いて居たが爲め、益々團結の瓦解を早め、翌七十年伯林に開きたる大會に代表された勞働者の員數は、更に二萬六百餘人に減退し、其翌七十一年の調査に依ると、會員數僅かに四千二百餘人といふ孤城落日の悲境に陥つて了つた。

◎マルクス派の社會主義者が、千八百六十八年に、ニュルンベルヒに開きたる會議に於て、萬國勞働團に加入するの議を可決すると同時に、勞働組合の設立を奬勵したことは、前回に述べた通りであるが、翌六十九年に、アイゼナハに開きたる會議に於ても、亦『國際的基礎に本く勞働組合の形成』を勸奬する旨を議定したが、全体この國際的勞働組合なるものは、寧ろ組合發達の終局點と見るべきであるのに、之を起發點として計畫したのは、既に策の得たものでなかつた上に、該派主義者も亦、前掲『勞働者保護會』に於けると同じく、各種職業の異同に依つて區別を設けず、一般勞働者の組合を設立せんことを企てたる爲め、實際上に於て、何等著しき效果を見ることの出來なかつたのは、蓋し數の免かれざる所であつた、されば彼等も、遂には其主張に係る國際的勞働組合の到底近き將來に於て實行することの出來るものでない、といふことを悟つたところへ、恰もよし、マルククス、ラッサル兩派政黨の合同が成立ち（千八百七十五年）、隨て、兩派の勞働組合も茲に融合する運びとなつた、が、まだ其頃の組合の勢力は誠に微々たるもので、千八百七十七年に、一私人の調査したるところに依ると、組合（進歩主義のを除き）の數、三十（内二十五は全國に亘る組織、則、中央組織を有するもの、五は地方組織を有するもの）組合員の數、四萬九千五十五人に過ぎなかつた。而してこの嫩芽を無二無三に蹂躙し去つたものは、同年發布の所謂『社會黨撲滅法』である（該法の内容、執行の模樣、利害等に就ては、後日紹介の機會があると思ふ）。

◎該法執行の結果　中央組織を有する二十五の組合中、十六は解散を命ぜられ、殘りの多數のものは、この厄に罹らざるに先ち、自ら解散して了ひ、地方組織を有する組合も、亦多くは同樣の運命に遭遇するを免かれなかつたので、一時は、勞働者の運動とさへいへば、その政治に關するものと、勞働組合に關するものとを問はず、殆んど跡を絶ちたるかの如き觀があつたが、新時代の内的必要に迫まられて起る社會的現象は、到底警察的處分の能く阻遏し得るところでない、勞働組合の葉は抓き裂かれても、その根はいつまでも枯れずに居て、いつか新芽を吹かずには止まないのである。ストライキの背後には、革命の怪物が躊躇つて居ると思惟せる、苛察なる警視總監の壓制の行はれつゝある間に、勞働組合は地方組織の形式を以て、百難を排して續々現出し來り、既に千八百八十二年頃には、其數五十の上に昇り、夫の『社會黨撲滅法』の廢止せられたる際、即千八百九十年には、無慮三十有五万人、即ち、該法發布の當時に比して、五倍の組合員を數ふるに至つた。

◎『社會黨撲滅法』の廢止は、社會主義勞働組合の發達に一新時期を開いたもので、同組合は是からして、河の下流を決し

たるごとき勢を以て、着々其歩武を進めて行つた。千八百九十年、伯林に開會せる『勞働組合會議』（有志の社會主義勞働組合の代表者の會合）は、假りに統一的機關として、ハムブルヒに、七名より成る總務委員を置くことを議定し、且つ之に托するに、全國の勞働組合大會を招集し、組合の新組織案を、この大會に提出すべきことを以てした。千八百九十二年、ハルベルスタットに開會せる『勞働組合第一大會』は、即右の議決に本いて開れかたので、之には三十万五千五百十九人の代表者二百八人といふものが參列した。この第一大會ころは、現今の社會主義勞働組合の組織の基礎を確立したものである。

◉右の大會に於て主な議題となつたのは、統一的組織に關する件で、この問題たるや、一見純然たる實際この手續問題たるに止まる樣であるが、其實は、なか〳〵そんな簡單な問題てはない、勞働組合の目的、性質に大關係のある問題であつたのである。といふとまた、當時獨逸諸邦の法律に依ると（この法律は千九百年に至り始めて改正された）多くは、政治を事とする結社は、他の同種の結社と聯結（同一の機關の下に）することを禁ぜられて居たので、其の結果として、或る勞働組合が、他の勞働組合と聯結するには、全く政治上の問題に手を出さない樣にしなければならず、若しまた、之に手を出さふといふ了見がある以上は、他の組合との聯結を見合はさなければならないといふ工合になつて居た。然るに企業者に對して、勞働者の利益を主張するには、一地方の組合の運動のみては、到底十分の功を奏する譯に行かない、どうしても他の組合と聯結する必要がある。斯ういふ次第であるから、眞に勞働組合本來の目的に重きを置くものは、勢ひ組合をして政治的行動より手を引かしめんとするに反し、勞働組合の假面を冠つて、政治問題に當らんとするものは、前者と反對の態度を採らざるを得ないて、組合を地方組織とせんとする連中は、「現在の經濟制の下に於ては、到底十分なる勞働者の地位の改善を望むべきてない、之を達するにはどうしても政治的運動に待つの外はない、されば勞働者の運動は、宜しく政治に重きを置くべきものなので、勞働組合を政治圏外に置くは、彼れ勞働者をして、動もすれば本來の目的を忘却して勞働組合に依り、現經濟制の下に蠢動せしむる所以てある」と論じたが、「勞働組合本來の目的は、現經濟制の下に在て、出來る丈ケのことをするにあるのだから、之を達せん爲みには、寧ろ政治的行動を避くるとゝした方が可い」と主張する中央派が大多數を占めたので、少數の地方派は抗議を殘して會議の席を去つて了つた。

◉斯く中央派と地方派とは、激論の揚句、物別れとなつて了たが、同じく中央組織說を主張する者の間にも、『職業組織說』と、『工業組織說』と兩說あつて、なか〳〵八釜しい議論が

あつた、職業組織說とは、例へば、大工は大工、指物師は指物師、車匠は車匠と、各職業を標準として、大工組合、指物師組合、車匠組合を組織せんとするをいひ、工業組織說とは、同種の職業を一括して、一組合を組織せんとするもの、例へば前例の大工、指物師、車匠等を、木工組合なる一組織の下に糾合せんとするものである。前說を主張する者の理由とする所は、「同一の職業に從事する者の間に於てこそ、密なる利害關係が存し、從つて、團結の精神の鞏固なるを得べきも、單に同種の職業といふだけでは、組合員が共同の態度を採るに當り、其の間余りに利害關係の疎なるが爲め、屢々一致を欠き、組合の活力を失ふ場合が多いであらふ」といふので、後說を主張する者は、「同職者てなければ一致の行動を採るとが出來ないなどゝいふのは、畢竟一種の族制的根性で、かゝる狹隘にして、卑劣なる精神は、之を勞働者の間より排除しなければならない」と論じた。そこて、總務委員の提出した案は何うてあつたかといふと、まづ各職業に從つて組合を組織し、且つ其組合の上に、更に同種職業の組合を包括する。『同盟組合』（この同盟組合と、工業組合との差異は、前者は既成の各組合を組合員とするに反し、後者は各個人を組合員とし、中間の組合を認めない點にある）といふものを組織しやうといふのてあつた。が、熟議の末、「工業組合は理想として最も完全なもので、直ちに實行し得へき情況の存する所では、實行するがよいが、今日直ちに之を一般に行ふにはまだ時機が早い。て、之を實行し得られない所ては、別に同盟組合といふ樣なものを設けずとも、只同種組合間の協商に依つて、必要に應じて共同の運動を爲すべきことゝし、一般組合が、或は工業組織の形式を採るに至るか、將た或は同盟組合の形式を採るに至るかは、暫らく將來の發達に委して可い」と云ふことに決着し、而して右の同種組合間の協商に依り、共力するを可とする事項として、左の諸件を議定した、一、同盟罷工の際相互に補助すること、二、旅行者（組合員の）補助、三、組合加入の勸誘、四、統計、五、職工宿舍及び勞働紹介、六、共同機關誌、七、組合員の一方の組合より他方の組合に移ることを容易にすること。

◉勞働組合の『第一大會』は、千八百九十六年、伯林に開かれて、これには、二十七万千百四十一人の代表者百三十九人が會し、千八百九十九年フランフルトに開かれた『第三大會』には、四十九万五千百三十八人の代表者百三十八人が參列した（第四大會は、昨年あつた筈だけれども、まだ其消息を詳にしない）。第二及び第三大會に於ける、重要なる議事は、總務委員の存廢、失業者保護、勞働紹介等に關する問題であつたがこゝにはたゞ總務委員存廢問題の經過を述べるに止めて置かう、第一回の大會は、總務委員の必要を認めて、之を常置の制とし、定員を七名とし、外に三名の豫備員を置き、事務所

をハムブルヒに設け、一、勸誘、二、統計、三、時報發行、四、國際交渉の事務に當らせることゝした。ところが前述べた通り、第一大會に於ては、勞働組合本來の目的に重きを置いて、組合を政治圈外に遠ざからしめることゝなつた、その行掛りからして、遂には勞働組合の總務委員と、社會黨の總務委員との間に大衝突が起つて、後者は前者を指摘して、「勞働組合の總務委員は、組合と政黨の軛轡を誘起し、因て以て勞働者の分裂を來さんとの陰謀を抱いて居る」とまで罵るに至つた。第二大會の開けたのは、この喧嘩の稍々下火になつた頃であつたが、それでも尙一部の組合員は、總務委員に對して頗る惡感を抱いて居つて、總務委員を廢して、其の代りに一人の書記長を置くことゝしやうといふ議が出て、此說は小數で消滅したが、新に『勞働組合委員』なるものを設けて、之に總務委員の事務を行はすことゝしやうといふ說は、贊否同數であつたので、總務委員は辛ふじて廢止の厄を免かるゝを得た。其の代り、先の定員は五人に減ぜられ、且つ別に評議員なるものが設けられて、必要に應じて（少くとも三ヶ月に一回）委員の議に與かることゝなつた。併し第三大會に於ては、最早委員の存廢は問題にならなかつたのみならず、五名の定員が元通り七名に回復された。

以上は社會主義勞働組合發達の概況である、次回には進んで、獨逸勞働組合の發達に就て聊か批評を試みることとしやう。

◉統計

最近數年間に於ける發達の狀況

度年	中央組合	組合員	地方組合員	組合員合計
1891	62	277659	10000	287659
1892	56	237097	7640	244734
1893	51	232530	6280	229810
1894	54	246494	5550	252044
1895	53	259175	10781	269956
1896	51	329230	5858	335088
1897	56	412359	6803	419162
1898	59	491955	15792	507747

最近數年間に於ける諸支出費目の關係

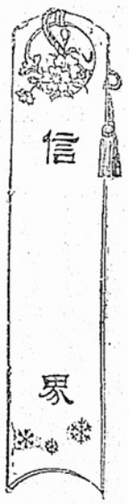
（金額は總て「マルク」を以て算ふ）

度年	法律事件補助費	被制者補助費	旅費補助費	失業者補助費
1891	10843	14737	144338	64290
1892	9705	236964	382607	357087
1893	12542	28321	328748	220926
1894	12902	14630	350455	239750
1895	15871	40307	302603	196921
1896	18349	37346	310000	243201
1897	30147	30973	289036	260316
計合	110359	403278	2107787	1582482

疾病補助費	罷業及危急補助費	廢人補助費	以上補助費合計	同盟罷工補助費	埋葬費合計
—	—	—	234298	1037789	154015
—	25284	21972	1033619	44943	285475
304648	41762	—	936947	65356	292157
425489	41744	—	1084970	188980	265957
454114	42080	—	1051887	253589	274398
430038	53837	57947	1150718	944372	362708
454494	64906	68088	1197960	881758	439259
2068783	269613	148007	6690309	3416787	2073969

千八百九十八年度に於ける勞働組合會計

收入	一六五、九二六同
支出	一三六、二二九同
資產有高	一四〇、四二三同
同盟罷工費	四一、六六五同
病者補助費	六、六七四同
旅費補助費	八三〇、八六〇同
失業者補助費	五、五〇八、六六七馬克
廢人補助費	四、二七九、七二六馬克
移轉罹式危急補助費	三、三七三、三一二馬克
法律事件補助費	一、〇七三、二九〇馬克
被制者補助費	四九一、六三四同
勞働紹介費	二八三、二六七同
組合新聞雜誌費	二七五、四〇四同
事務用品費	七九、五八七同
遊說、勸誘費	七八、四一九同
俸給費	四三、三七八同
會議費	三九、九七八同
訴訟費	三、八二六同
其他の費用	五一八、九四九同



續靜觀錄

（四）自然の法則

近角常觀

物質界に於て物理學的法則の行はれつゝあることは誰も拒むものはない、夫と同樣に精神界に於ても一種の法則の行はれつゝあることは、實驗上疑ふべからざる事實である、五の力と十の力と相引くときは十の力が勝つ如く、善にせよ、惡にせよ、其力の强き方が勝つものである、若も善の力が十にして惡の力が五であれば善の力によりて惡しきものが滅さるゝが、之に反して惡の力が十にして善き心が五であれば、惡の爲めに善が消へ去るものである、又水平線に高低ある二個の池を樋を以て相通ずれば同一の水平線になる如く、人と

人と交際するときは互に相感化して同一の水平線を保たんとするものである、面積の小なる高き水平線の池が、面積の大なる低き水平線の池と樋を以て通ずれは、勢、高き水平線は忽ち引き下げられて仕舞ふものである、其如く少小の善人は兎角惡しき人、惡しき心、惡しき力に負けて仕舞ふものである。

以上擧げたる事實は物質界の法則を以て精神界の事を形容したるものであるが、實驗上慥かなる事實である、而して此の如き精神的法則か如何なる範圍まで行はれつゝあるか、顚る其涯底を測り知ることが出來ぬ、吾人の經驗する所によれば此法則なるものは、慥かに時間空間の範圍に於て局られざるものにして、其行はる境域なるもの殆んど無限の時間空間に渉るものである、かく物理界に運動の法則が存する如く、精神界にも一種の法則が存するに違ひない、所謂感應道交なるものは此法則を言ひ顯はしたるものである、

偖物理界に運動の法則はありとするも、其法則の運行するには其運動の原動力を要する如く、精神界に於ても其原動力の何たるかを知らねばならぬ、即ち十は五に勝ち大は小に勝つと云ふことは明瞭であるが、其十若くは五の『力』と稱せらるるもの又高き若くは低き水平線を形体る『水』なるものが何物であるかを知らねばならぬ。

吾人か普通に經驗する範圍に於ては其力は吾人の『心』である、吾人の惡しき力は惡しき心即煩惱である、吾人の善き力は善き心即慈悲心である、然るに此力が吾人の社會上に於て即ち人間界に於て行はるゝことは、毫も拒むことの出來ぬことは明瞭であるが、此力は唯、五十年乃至百年の人生にのみ存するのみてなく、幽冥界に於ても此力の存在することを實驗するものである、即心の力なるものは吾人の五十年乃至百年の生涯を以て終るものとは考へられぬ、此に至りて所謂三世因果の法則なるものも實驗上明らかに映りてくる、故に三世因果の法則の如きも天然の法則を廣き範圍に於て行はしめたる而已の事て、決して怪しむべきことてはない、唯物理界に行はるゝものを精神界にまて及ぼし、現世界のことを現世已上に及ぼしたるまてのことである、三世因果の法則の行はる原動力を『業』と名けて吾人の所作の力に歸したるは實驗上何人と雖、拒むべからざる教理てある。

かく心の『力』なるものが無限の時間、無限の空間に働く上に猶一つ大に考ふべきことは其『力』の分量なるものが、普通の人間の力の分量としては、迚も考ふべからざることがある、兎角人間界に於ては惡しき方の力は實に無限にあり得るも、善き方の力は常に微弱なるものである、我々が自分の胸中に尋ぬても又他の人の自分に對する所作を考ふるも、善き力が惡しき力に打勝つ程の分量を認めることが出來ぬ、故に眞面目に人世を考へてみるときは實に心寂しき限りてある、世は惡しき心が勝ちて善き心が漸々滅さるゝとするときは、

世界は墮落するのみてある、社會は闇黑になるばかりてある、然るに我々は實驗上時々『大なる力』を感ずることがある、非常に暖き『慈悲の力』を感ずることがある、非常に淸らかなる『智慧の力』を感ずることがある、世に人間だけの力の分量ては實際解釋の附かぬ場合が多い、私は考へる、世に慈父悲母の愛なるものがなかつたならば五十年の人生は實に興味なきものてあろう、其如く此無限の時間に繼續せる大人生の間に於て此『人間已上の力』なるものがなかつたならは實に何等の味もなきものてあらう、然るに幸なことには吾々は實驗上此力の働けることを感する次第である、此『力』を一つ一つ名つけて諸の佛、諸の菩薩と呼びたるものてある。

偖信仰の純粹ならざる間は此力を別々に感する樣になる、隨て色々の德を具ふる佛、色々の力を有する菩薩が數多く出來る樣になる、而して此方より此力に求むる心か場合によりて異りて來る、即ち諸の佛の力が色々異りたる結果を持來す又其各々異りたる場合に其結果を下さる樣に諸の佛に求むる心がある、然るに熟々考へ來るときは此諸の力なるものは、決して別々に存在して居るのではない、結局一の大なる救濟の力てあると云ふことが分かりてくる、かく大なる力が唯一絕對の力てあると云ふことが分かりて來れば、其大なる力は常に救濟を下ださるゝによりて、決して各の場合に應じて、求むる必要がない、唯其大なる力を信ずればよい、寧ろ信せざるを得ないのてある、其力を信じたるものならば全體結果を豫測して佛に求むると云ふことはあるべきことてはない、所謂心だに誠の道に叶ひなば禱らずとても神や守らむとの意味てある。

偖此多くの別々の力を別々に認めずして唯一の濟救力を感じ、結果を求めずして唯力を信じて之に任すと云ふことは、信仰の實驗上實に言ふべからざる味の深き點てある、なる程色々の場合に於て色々の力を感じて、色々の人格を認めることはたしかに初めて人間已上の力の存在することを認めるときは止むを得ぬことてあるが、熟々考へて見るに、此の如き或場合のみに感する佛では決して十分の安心が出來ぬ、又唯自己か煩惱苦惱を感する場合とか、不幸災難の起りたる時にのみ佛の力によらむとするがやうに部分的に救濟の力を求むるのは、決して信仰が純潔に達して居らぬのてある、全體我々の腦中は絕へず惡しき心が起りつゝある、我々の所作は一として汚れざるはなきものてある、我々は其力を或場合のみに感して居る位ては隈なく佛の光明を拜む譯には行かぬ、我々が折々に感ずる力は別物ではない、唯一絕對の佛の救濟力てあることを認めたのが純潔の信仰である、法然聖人か諸佛菩薩を彌陀一佛に收め來りて一向專修の念佛を勸められたは實に無量の味がある、夫故親鸞聖人も法然聖人に勢至の智慧を感じ、又聖德太子に觀音の慈悲を感ぜられたれども、結局

之を彌陀の無量の德の顯現として、唯一救濟の力のみを鑽仰せられたは、抑々淸らかなる醇乎なる信仰を見ることが出來る。

かく力が唯一絕對なることを認めても、若し、此絕對に向ふ心持が各の場合に結果を豫想して此力に向ふならば、未だ純粹に救濟力を感じたとは言はれない、全體結果を豫想すると云ふことは、眞實救濟の力より來る結果ではないのである、寧ろ人間が利己的の精神より割り出して、人世的快樂を貪らむとする鄙劣心が佛の力を利用して之を得むとする頗る橫着なる心である、此の如き心は隨分あり勝ちのものである、極穿ちて云へば自分では決して求むると云ふことはせぬ、然れども必ずやかく幸福が下だるであらうと心の底に待ち設ける心の起るものである、祈らずとても神は守らむとあれば目を閉ぢて居る間に、かくし玉ふらむと云ふ樣な橫着なる心の起るものである、此の如き心が雜り居るときはたとひ絕對の力を認めたと云ひつゝも此方の認め樣が絕對とは云はれぬ、純粹とは云はれぬ、此に於て雜行雜修と云ふ意味が實に明瞭になりて來た、親鸞聖人が一切の祈禱を廢せられたも實に純潔なる信仰の極をあらはされたものである。

結局純粹なる信仰なるものは、吾々の人生を初めとして永久の後の生まで、佛の大なる唯一絕對の力に救濟せらるゝことである、而して吾々は其力の無限力に任せて結果の如何を彼れ此れはかろうと云ふことなく、唯救濟の力を仰ぐことである、此の如き『力』は實に人と人との間に働く心の所作でなく、佛の大なる所作である、即『大願業力』である、若し人間の眼より見れば實に不可思議である、何故と問ふてみても、此の如き不可思議力を吾人は感ずると云ふより外はない、偖此の如き不可思議力のある已上は、此力によりて救濟せらるゝことは決して怪しむべきことではない、寧ろ當然のことである、物理界の引力の法則によりて石の地に落つるは自然の法則である、善き所作は善き結果を招き惡しき所作は惡しき結果を招くは是亦業報因果の自然の法則である、今佛陀の不可思議の救濟力によりて我々は何等のはからひなくして助かると云ふは大願業力の自然の法則である、此に至りて親鸞聖人の言を味ふべきである「自然といふは自はおのつからといふ行者のはからひにあらす、然といふはしからしむといふとばなり、しからしむといふは行者のはからひにあらす、如來のちかひにてあるがゆへ法爾といふ」「法則といふはしめて行者のはからひにあらず、もとより不可思議の利益にあづかること自然のありさまとまうすことをしらしむるを法則とはいふなり一念の信心をうるひとのありさまの自然なることをあらはすを法則とはまうすなり」「他力には義なきを義とすと聖人のおほせことにてありき、義といふことははからふことはなり、行者のはからひは自力なれば義といふなり、他力は本願を信樂して往生必定なるゆへに、さらに義なしとなり」と、實に味ふ程味のある言葉である。

淸澤先生を悼みて

朝來雨そぼふりて、旅窓きはめて寂寥を感ぜしむるをりから、常盤大定君よりいたせるはがきはつきぬ。記するところ直に我おどろきとなりて、しばしは心の身にそへるを覺えず。一時に重り來る追想はやがてかなしきおもひを增し、うたゝ沈み勝なりき。直ちにしたゝめんとせし文さへ成らず、何をなすともなく、椅子によりて午前を過しけり。

其時我胸にうかびしおもひは凡て悔のみ、おそれのみ。先生の在世のをりから何故に我はうとかりしか、先生が智識の師となつて我等が乏しき心を導き玉ひし昔こそ、今我學界に出るを得たる因なりけるものを。親しくまみゆることを得し時には遠かり、わがかゝむ文をみそなはし給ふべき折ありし時にはかかず罪ふかき不弟の身ともしらで過ごしゝことの口惜さよ。恩をわすれ義をうしなひしとがのおそろしさいまに至りておもひしりぬ。かなしともいたましともいふにまされる、我くいは身をもだゆるばかりなりき。

こは十日前(七月十六日)のことなりし、下りてけふとなりぬ。朝に夕に講堂に走るまゝに文かゝんことも忘れつ、いよ〳〵罪ふかき身なりけり。さるにけふ村上龍英君よりのはがきを見たり。政敎時報第百貳號を手にしたり。いづれを見るにも淸澤先生の此世を去り給ひしことをしるさぬはなし。他の文ども何れかしこからぬはなしといへども、けふは先生の逝き玉ひしことの下りのみ目につき心にしみておもひ一しほなり。西窓のもとしづかに筆をとりて弔のこゝろを兄のもとにまでいたす。天外萬里の客はしたし〳〵華をたむけ奉らんこともかたければ、なげきの雨は異鄕にさすらひぬる遺弟の袖に上にもふりかゝりけるほどを兄よりつたへ玉へかし。親しき妻をさきだて、めづる子におくれ玉ひし先生のいまは等しく淨華の上にうつくしくほゝえみ給ふならんとはつたなき身にもうたがはねども、血をそゝぎ骨をくだきてまで世の爲人の爲につくし給ひし先生のはかなくなり給ひしことといかでかなしからざらめや。先生の靈はありしまゝのやさしき心もて、とこしなへに我をみそなはし給ふらん。げにありがたきことといふべし。さりながら、我こゝに來ん折はしたしく我右に座をとり玉ひて語りあひつゝ食を賜ひしに我歸らん折はつひに身ながらもうあひ奉ることもかなはずなりしかなしさはたとへん樣もなし。兄よ願はくばくいつなげきつゝくるしむ我のこゝにあるを告げ玉へ。先生の靈に香華をそなへ給はんときは名にても兄のかたへにはべらしめ玉へ。あさましき心はかくてやゝやすらひぬべし、あはれと見玉はゞ我爲にさし給へかし、緣あさくてまのあたりとふらひ申すべき事のかなはざりしあはれなるものゝおもひをおしはかり給かし。

明治三十六年七月廿五日雨はけしきをり、
獨乙國マールブルヒの客舍に於て

藤岡勝二

雜録

五十年の我等

百目木劍虹

我等はいかにも愚かなものである。自分で自分を苦め、多くの苦痛を招き、多くの心配をかさねて居る。實驗上時としては憂心忡々として終宵眠り安すからざることが屢々ある。いはゞ自縄自縛である。他より受けたる縄は解ける時があらふが、自らなせる迷執の網は甚だ斷ちかたいのである。

哲學を學んだ人は百千の奥底まで探り到りても、疑の土積は層々疊々として際限なく、いかほど死力を盡すとも茫乎たる宇宙の秘密を知るとが出來るものではない。哲學者は哲學を以て自ら苦み、自ら悶えて居る。獨り哲學者斗りでなく、社會の人多く此弊に病むのである。愚者は愚者相當に愚痴を起して心の泉に濁波を擧げて貪慾の水を增し、智者は智者相當に高慢の鼻を高くして名聲を求めやうとして居る。婦人は婦人的に嫉妬の炎を燃やしつゝ小さき胸を焦かして居る。かくして吾等は身心を勞し多くの苦痛を招くのである。吾等は洵に淺墓なものである。愚かなものである。

先づ我等は第一に吾等の本分を知るがよい。天地の悠久に比すれば、五十年の我等の生涯は、且つ消え且つ浮ぶ泡の如く短かくしてはかないものである。吾等は幸福の爲めに名譽を求むるもよい、嫉妬を起すもよい、貪慾を增すもよい。けれども名譽や、嫉妬や、貪慾は無限にして涯りなきもの、不完全の吾等の力にては到底之を滿すとの出來るものではないよし一旦は之を滿すとの出來るとしても、之が爲めに吾等の心は平安なる狀態に安ずるとが出來ない。乃ち如何にして名譽を得らるべきか、如何にせば利慾を得らるべきかの一念胸中に往來して、一刻もやすまる事はないのである。而も人生の浮沈には極りがない。榮枯あり、盛衰あり、生あり、死あり。今日の榮ゑもとより明日を期しかたいと同時に衰ふるも亦悲むに及ばんのである。古より百歳の人少なく、曾て萬年の長者もない。驕る平氏久しからずとはいみじき言葉である。打ち續きたる德川三百年の長流は滾々として盡きざるべしと思ひきや、一朝にして維新の瓦解に遇ひぬ。天地自然の法則は不思議にも其軌道を逸することがない。冬の後には春も夏も秋も規律正しく吾等の前に來るではないか。果して吾等の望みし名譽、權勢。利慾其等の者を得たりとて、また束の間に失せ去るとのはかなきを思はゞ、迷執の網もて之を括りつけるにも及ばぬ話である。

全体吾等は此の短き生涯をば如何に過すべきかと云ふことに付ては、曾て釋尊も苦しみ玉ひぬ。基督も苦しみぬ。ソクラテスも苦しみたる古今の大問題である。若し我が所信にして誤りなからしめば、五十年の我等の生涯は心を苦しめざるにあり、即ち其心を淸らかにして迷執を離るゝことである。此心廓て擴充しなば漸々自我は沒却して宇宙の靈體に一致するであらふ。勿論吾等は權勢を望む、されば權勢其者にはいつまでも迷執を結ぶものではない。名譽と云ひ、利慾と云ひ決して卑み且つ排斥すべきものではない。只凡夫の悲しき遂に迷執を離るゝとの難きを恨みに思ふ斗りである。燦然たる寶玉は何人も好む所、美人を美人と思ふは何人も否まざる所、要はたゞ迷執を離るゝにあるのみである。

五十年の我等の生涯短かしといふものの、之を蜉蝣の一生に比すれば、亦甚だ長しと云はねばならぬ。而して其行程の中に悲しい時もあり、喜ばしい時もあり、泣くこともあり、笑ふ時もあるであらふ。人生は決して春の麗かなる日斗りではない、時としては天、黑雲を捲いて雨を呼ぶこともあらふ。人生は坦々たる大道のみ步むと思ふは極めて經驗の淺き人にして、未だ人生問題に就ては其眞味を知らぬものである。嶮山前に在り、虎狼後より迫ることもあらふ。乃ち吾々人生も其通りである。貧に惱む人、病める人、妻を亡ふ人、兒に訣るゝ人、窮兒、孤兒等其他數へ來らば尙多かるべきも、是等は人生の最も悲慘なる歴史と云はねばならぬ。此悲慘なる歴史を有する人にして誰か其心を苦めざるものやある。然れども自ら其心を苦めば苦む程、悶げは悶かく程、一倍の苦痛は增し來りて輾轉反側天に訴へ人を怨むに至るのである。けれども苦痛は依然たる苦痛である、煩悶は依然たる煩悶である。然らば吾等は如何にして此等の苦痛を脫却すべきかといふに他に方法あるわけではない。貧にありて貧を貧と思はず、病にありて病を病と思はず、患難に處して患難を事とせず、苦痛に際して苦痛を念とせず、胸中聊かも迷執の雲影を止めざる事である。而し自ら迷執を離れむとしては迷執は離るゝ者ではない、影の形に從ふと同しく迷執は身に副ひ心に從ふ者である。於是乎、我等は絶對他力の妙用を感ぜずに居られぬ。

要するに、五十年の我等の生涯は、信仰の生活より外に吾等の選ぶべき道筋はないのである。吾等の前途は他力信仰の目標に向て進むのである。罪ある吾等、惱める吾等は之によりて救濟せられ、光りを受けて始めて新しき生命は付與せらるゝのである。すでに佛陀矜哀の慈雨に浴する吾等は、最早や未來の存在を疑ふ限りではない、靈魂の滅不を問ふ限りではない。吾等はすでに信の一念に於て吾等の心に大安住の柱は打ち建てられるのである。

＊　＊　＊　＊　＊

欲求原理と實在原理

楠　龍　造

宗教は欲求原理であつて實在原理ではないと或人は云ふ、智識あつて宗教に趣味をもつて居る人は、宗教に對して大概ソー云ふ考をもつてるらしい、成程考へてみれば尤もである樣に思ふ、絶待の慈悲絶待の智慧、永遠平安の淨樂界、そんなものは何處に實在して居るか、如何に天界を探しても如何に海底を搜しても、出て來たためしがない、亦出で來ようとも思はれない、されど我等の中心奥深き要求として存在することは疑ふ必要はない、嗚呼彼のうるはしき空想者、觀念を以て實在なるかの如く觀ずる詩人一派、北喩的直感に秀でたる神秘家、嗚呼彼等はヨッテ以て欲求を實在と化し、觀念を實在と化し、比喩を事實と化したので、儼然たる宗教は出來たのである、宗教に趣味のあるはこれによるのである、宗教の人心の琴線にふれるのは欲求原理であるからである、されど〳〵宗教家の樣に實在原理にするは如何であらう、我輩も時々コー云ふ考を起したのである、

我輩の宗教に入たのは、敢て罪惡觀からでない、私は自己の罪惡に迫まれて立つてもすはつても居られない云ふ、感を起したことはない、道友中には痛切なる罪惡觀から宗教に入たと云ふ人はある、其人々には敬服して居る、私は敢て胸中一點の煩惱ないとは云はない罪惡ないとは云はない、さり乍ら罪惡で苦しくて〳〵たまらないと云ふ程でない、是は一つ私の鈍い性質にもよるだらーし、一は私は人類の欲望活動を以て多くの宗教家の樣に罪惡視しない主義にもよるだらうと思ふ、ソンナラ无常觀から宗教に入たかと云ふに、敢て生老病死の現象に驚いて宗教に入たのでもない、謂はば一種の運命觀から宗教の信仰を求めたのである、闇黑に彷徨すれば切に燈光の必要を感ずる如く、一種の運命觀は信仰確立の要を認めしめたのである、一種の運命觀とは何んであるか、之をつゝめて云へば、此人生と云ふものは坦々たる如髮大道のみでなくして、意識的また无意識的に作られたる多くのオトシ穴もあり多くの迷路もある、人一度此オトシ穴に入れば或は粉碎せられ或は百傷を負ふて漸くのがるるのである、一度迷路に入れば百千の辛苦徒勞に蹄し苦しき厄難にかからねばならぬのである、人生の行路は必ずや此オトシ穴にも入り迷路にも入らねばならない、斯るときに私は光明耀乎たる信仰を要するのである、信仰は此オトシ穴に入ても恐怖せない、悠々としてなすべきをなすのみである、粉碎せらるべくは粉碎せられ、のがるべくはのがるゝのである、平和と光明を以て之に處するのである、迷路に入ても驚かない、迷ひつめに終らなければならないならば、悠然として終るのである、出る〻ならば悠然として出るのである、平和と光明を以て之に處するのである、生死岸頭に立ちて動搖せられない、或物を捉住するのである、これが我輩の信仰である、日頃云ふ所の絶待他力依憑とは、此或物を捉住したのである、私は世上を見て多くの同胞が此の人生のオトシ穴に入て苦しみ、迷路に入て苦しみつゝあるをみて、一層ヒシ〳〵と信仰確立の要を認めずにおられない、此の人生の運命なるものが私に信仰確立を迫るのである、私は時々青年の道友と此問題を話した所が、私と感を同ふするもの十中七八であることを認めた、

そこて我宗教は絶待他力依憑である、凡ての境遇に就て凡ての場合に就て他力をみとめる、他力とは如來の力である、慈悲と光明をみとめる、全體前に云ふたオトシ穴に入るも、入らなければならぬ譯あつて入たのだとすれば、矢張り坦々たる大道を歩むと同じ譯ではないか、坦々たる大道のみに愉快があるではない、世にいはゆるオトシ穴に入る、悠然として他力をみとめたならば、此處に慈悲もあるナサケもある、教訓もある訓示もある、迷路に入るも同じことである、如來の力をみとめたならば、やるせなき慈愛がある、昌平の光明が充ちて居る、親や師に叱られたときは、叱られたと思へば腹も立つけれども、慈悲と教訓の賜物だと思へば、感謝の涙が流るゝてもないか、病氣すれば苦しいと思ふから苦しいけれども、病氣せなければならぬ譯ありて病氣したとすれば、風吹いて木の葉が動く樣なもの、少しも驚くべきでない、臥床中には臥床の別天地あるから、起て働くばかりが人間の勤でない、床の中に靜觀が出來たら靜觀すればよいぢやないか、唸かすと欲すれは唸けばよいぢやないか、樂みまた其中にあり、平和の光明其中にありてある、如來他力をみとめるものは幸なる哉、凡ての境遇に慈悲をみとめ光明をみとられる、

凡の事に慈悲をみとめ光明をみとられる、我輩の信仰から云へば、宇宙全体は慈悲の原理から成立せるものである、欲求の原理でもあり實在の原理でもある、如何に欲求したからとて不實在のものは實在とならない、貧乏人が如何に千金を欲求したからとて、千金は出でこない、宇宙が若し慈悲でなかつたら如何に我輩善觀せようと思ふたとて善觀し得らるべきものでない、然るに我輩は一切の場合一切の事物に對して慈悲と智慧を感んじ得らるゝのは、宇宙それ自身が慈悲の原理から成立せるからである、若し人が一切の事物に慈悲を感し得られないと云ふ人あらば、其人は心眼が開かないからである、盲者の見ざるは日月の過失ではない、嗚呼慈悲は欲求原理にして實在原理である、世界多苦觀は我と信仰を同ふするものでない、盲目的器械的世界觀は我れと信仰を同ふするものでない、

一日閑に乘して英國トマス、ジョン、バルナードの傳を讀んだ、彼は醫學生たりしときたまたま疾病豫防掛となつてロン

ドンの貧民窟をみたのが、動機になつて、无告の貧少年を救濟せようと志した、嗚呼彼の慈悲は三十年に三万人の少年を救濟して善良の人民となしたと云ふではないか、慈悲は慥に實在原理である、慈悲に隨ふものは榮へ、慈悲に反すれば人皆亡ぶではないか、近角兄は此頃如來は力なりと云はるゝ然り如來は慈悲の力である、慈悲の力は欲求原理にして實在原理である。

佛教信徒家憲私議

菊池耕雲

佛教信徒の家憲は刻下の好問題にして佛教實踐者の一日も忽かせにすべからざる要務なり、顧ふに現今社會の思想は種々の事故に遭遇し既に科學萬能の時運を經過して、各自に精神界の研究を重要視するの傾向あり、國運の發展上喜ふ可きの現象にして、所謂二十世紀は物質學の上に精神學を重疊聯累すべきは理數の大勢なりとす、惟た然り社會は教育にのみ依頼するの架空なるを知れり、人心は功利のみを切望するの成功少きを知れり、故に切實道を求るの士と名譽を眩ふの人とを問はす、翕然相率て倫理と宗教とを絶叫するの聲漸く盛んならんとす、而して世人は既に空理に飽たり、又僞善の徒勞なるを覺る、是に於て切實に脩身齊家の實踐し易くして而も益多き者を求めさる可らす、是れ余の不肖を顧みず竊に佛教信徒の家憲をつくり廣く江湖に示し是正を仰かんとする微意也、私に按するに其信條上層に適して中層と下層とに適せさる者あり、下層に切にして全く上層に適せさる者あり、或は其宗派の別に依て自ら信仰の對象を殊にする者あり、或は神佛混同を以て我國家特殊の信條と信認する者あり、具體的に之か成按を要求するは頗る難事に屬す、故に今該括的に其主要なるものを纒綴して自己の信認を表するのみ、若夫れ具體的成按なる者に至ては他日更に討論して教を請ふことあるへし。

一、佛教の眞理に基き各自の信念を修養し敬虔の念を深厚ならしむる事。

凡そ佛教の信條は其宗派に依て對象を異にするものあるへしと雖、其眞理は唯一に飯す、故に小乘あり、大乘あり、聖道あり、淨土あり、自力あり、他力あり、即身成佛を唱るあり、他土入證を示すあり、其說く所表裏反對の如き觀あるも一物の兩面にして元來二物あるに非るなり、譬ば月影の大江小池に印映するや、大小清濁其形を異にすと雖も元來大空廓清の一明痕に過ぎず、又舊帝都に上るに東海道と中仙道の區域ありと雖元來一の平安城在るあるのみ、故に各自に有緣の宗教に據て先自己の信念を修養し佛陀の慈悲と智慧とに依りて確固不拔の根基を定めさる可らず、

此信念一ひ安立して不動ならば其本心已に佛教の眞理に契合し、佛陀の人格に冥融するを以て平素事に處し世に處するに方て愼肅畏敬の念油然として興り、倨傲ならず、放肆ならず、怠惰ならず、容貌も必らず恭く言語も必らず謹み、優游自適自ら中庸を得て誤りなきに至らん、故に諸を首條に置く。

二、日常の資糧は佛陀白毫光の恩賜なれば努力して質素節儉を主とすべき事。

衣食住の三者は人生生活の一大資具なり、一日も之を闕く可らず、而して社會の狀態は貧富貴賤上下の別に依て用る所ろの資糧亦た類別あり、吾人は已に業に信佛の基礎確立せり、日常の用資皆な佛陀白毫光の恩賜なることを服膺せり、吾人は個個萬差の境遇は均く因果の法則に準據することを確信せり、何を苦んで他の富貴榮華を羨望せん、只管勤勉節約を主として自己の福分を增長することを企及せさる可らす。

三、衛生は身體保持の要務のみなちす常行大悲の生存上平素攝養の注意の怠る可らさる事。

身体の保持は動物自然の理にして孰れの劣等物も生を樂み死を畏れさる者なし、殊に人類は精神と身體との二元より成る、身體は精神の住處にして活動の地なり、又行爲の機械なり、最も身体を健全にし生命を保護するの計なかる可らす、殊に信佛の徒は身心共に佛陀の所有にして現在の生存は唯佛陀の大慈悲を傳布するに在り、故に長時永劫の慈恩に酬ひ國家外護の洪恩に報し三寶を恭敬崇奉し社會の利益を圖るも均く此形骸に在り、殊に攝養の注意を怠らす一日も永く生存して四恩に酬報するの務なかる可らす。

四、日常の行爲及百般の職務は渾て報恩の經營なれは勤勉克己の實を表すへき事。

吾人日常の行爲は宜く善良なるへくして而も粗暴に趨り易く、百般の職務と應に勤勉なるへくして而も怠惰苟且に陷り易きは邪見放逸習慣性を成して其力熾盛にして容易に制伏し難きに因る、吾人の信念已に確定せは身心共に佛陀護念攝受の中に在て存す、不知不識躰慾及ひ不當なる名利の慾を省察して時處位の境遇に應して勤愼勉强なるを得へさなり、是れ暗黑を出て光明を得たる佛陀へ對する報恩の經營也。

五、家族の和合は佛陀の冥鑑に畏敬し益々自己の堪忍力を修養する事。

一家の和合は人間快樂の最上也如何に富巨萬を重さねて大厦高樓に住す共、家庭恒に圓滿を缺き人倫の間に於て互に反目嫉視紛諍斷さるか如きは實に人生の不幸之に過すと謂へし、凡そ人として誰か和合を喜はさらん、而して其實蹟至て擧らさるものは何そや他なし、私欲と私情とを抑制す

ること能はざると又忍ぶ可らざるを忍ふ能はざるとに因れはなり、佛教無我の眞理は自我を滅却して我相に執着せざると共に所謂任運無功用にして毫も事物に凝滯せざるにあり、而も上に佛陀の照覽。監督する有て觀さる所に畏れ開さる所に愼む、故に能く我情を融解して遂に忍ふ可らざるを忍ふに至る於是乎和合の實自ら成る。

六、家族團欒して佛教の信念を增長するの良習慣を養成し又は有德の師に就て時々其教誨を請へき事。

吾人私情私欲の爛んなる幾んと信念をして減退せしむるもの也。故に毎月一回若くは閑暇の時日を期して必らす闔族一席に團欒して或は經文に就き又は事實に就て互に胸襟を披瀝して信念を增長することに勉むべし。

又闔族協同して一定の時日を期して有德の良師を聘して、其講話を聽聞するか如きも最も有益なる事實なるへし。

七、禮儀は簡繁宜きに隨ふへしと雖も追遠の勤は殊に敬意を主として懇誠執行すへき事。

禮儀は中心の表發なり、中心篤實にして誠を存すれは其容貌動作必らす悲肅なり、凡そ百般の儀式典禮は其境遇に順應して簡繁あるへしと雖も、婚喪祭の三事を以て大禮とす故に佛教信徒たる者は婚を作すにも早約早離の弊害を矯正せんには佛教上一定の儀式を協定するの時機あるへし、茲に論及するに遑まあらす、喪式と祭祀とに至ては特に虛飾を省約して眞誠なる哀悼の意を表し、切實なる追遠の誠を罄ささる可らす、又平素の勤は晨朝洗嗽し了らは家長を始め兒女子に至るまて、必らす其安置する所の佛舍に向て敬虔の意を表して佛陀に禮拜し、次に祖先の名牌に禮拜し續て父母祖父母等に省して而る後業に就き一日の作業全く了て寢に就く時も亦た前時の如く行ふへし、其他年忌月忌等に至ても都て虛禮に趨らす、眞誠に基きて崇奉供養するは所謂其神在すか如くなるへし、是實に佛教者の務なるのみならす、實に我國家主義の圓滿に發達して悠久に忠孝の大義を傳承する一要素なるものなり、豈忽せに看過す可んや。

八、私德を修め公德を正くして國利民福を謀るべき事。

由來私德を修ることは東洋を以て勝れたりとすれども、公德に至ては西洋の諸國反て完全に發達せりと謂べし、現今我國運漸次旺盛に向ひ隨て國際問題も亦た複雜頻繁ならんとす、此際最も其何の業務を問ず時間約束等を嚴重に履行するの良習慣を養成せざる可らず、是れ我國佛教信徒たる者の長時に服膺すべき信條にして歷劫苦修の小乘教を修めずして速證易修の大乘を信じ、剩へ來世の苦果を脫して身心に大安慰を得たる國恩に報ずる先天的唯一の務なるべし。

九、人倫の爲には尤も慚愧反省の念切實ならざる可らざる事。

我儕人倫の中に伍して生より死に至るまで朝夕百般の事を處する咎過自ら多くして功少きは各自に經驗する所なり、蓋し何なる君子至人と雖も過なき者はあらざるべし、凡そ耻を知ると知らざるとは君子小人の區別にして能く此心を修養するときは學問德行事業皆以て成功すべし、又人の常情として他人の過は明かに見るの知あれども、己の過を見ること難く、隨て人を誹謗し輕蔑するが如き德を生じて益す其惡を增長して遂に改善する能はざるに至るものなり、殊に佛教信者は既に佛陀光明の利益を信認する者と雖も煩惱熾盛にして此の如き惡德に誘惑せらるゝなきを保せず、故に恆に家族相會し又は同朋相集り、又は明師に就て其教を請ひ萌芽僅かに小微なる時に方て速かに中心より我行爲を慚愧すべし、且能く我身を反省するに切實便利なる方法を講究して怠らざることに注意せざる可らず。

十一、社會に對しては衆生恩報謝の爲に能く信義を盡し仁慈を行ふことを修養すべき事。

我人は佛陀の冥祐に依て已に身を修め家を齊ふことを得たり、尙宜く社會に對するの義務に誤謬なからんことを期すべし、凡そ社會は活物なり變化恆に窮りなかるへしと雖、無我平等の眞理を以て一切を達觀し過去衆生恩を眼前に比量して熟慮するときは、人として恩なきはなく物として德ならさるはなかるへし、於是人の爲に謀るにも誠實にして己の爲にするか如くなるへし、約束を履み行爲を愼み中心より社會の幸福を冀ふへし、又佗の天災人爲の不幸に際しては勉めて同情を表して之を賑救すへし。

十一、國家に對するの德義を堅く守るへき事。

聖統一系の元首上に君臨したまひ、至高圓滿の佛教國內に流布して長へに愛國尙武の氣風を增進し忠孝優美の民俗を養成して渾圓球上に卓然屹立するは我國の特色也、益々憤發協同して國家の富强を圖り平素國法を遵守し、租稅を怠らす、兵役に服して、殖產興業の隆盛を謀るは乃ち吾人祖先の佛教信者として皇室に盡し佛教に盡したる經營を繼承するものにして、殊に托生聞法の國恩を報酬する義務と謂ふへきなり。

十二、來世の爲には無常の觀念を失却せす平生其覺悟を確實ならしむる事。

宇宙の現象は生滅變遷新陳代謝して暫くも止ます、生あれは死あり、死あれは生あり、生死去來の相狀猶し海面の波瀾動搖して止まさるか如し、之を無常と謂ふ、此理を知る者は平素之に處する覺悟なかる可らす、故に現世には謹勉貯蓄して天災凶變に準備するの念あり、道を修め德を積て逆境に遭遇して變せさるの用意あり、而して智愚賢不肖を問す、信念安立して生死の大問題を解決して、死して來世に逝くもの其本土に歸るか如くならしむるの用意に至ては、

獨り佛教信者の能くする所、生死の一大事を把住して無常の觀念をして切實ならしめ、其中心に大安慰を得て平素現世と來世とに對する覺悟を誤りなからしむるの工夫を怠る可らす。

大垣藩勤王始末序

藤陰野村煥　故大垣藩督學

南條文雄

大政之復古也。朝廷命我故大垣藩主出兵爲東山道先鋒、以征東北諸藩誤方向者、明年夏以藩兵慰奏戰功、賞賜三萬石於藩主、々々乃分若干以賜有功者、又建招魂祠祭戰死者、永使不絶其祀、於是乎死者尙如生、然苟不審其本末、則義烈之蹟或不保無湮滅、是淺井君謙藏之所以有此擧也君曾從其軍、多喪戰友於亂離之間、感愴之餘、纂輯當時之文書、起戊辰正月盡己巳六月、一年有半、細大不遺、年月日時、整然排列、使讀者有身在其間之想、可謂勉矣案戊辰九月八日今上發詔、改慶應四年爲明治元年、革易舊制、一世一元以爲永式、而卷中文書、九月中旬以後尙有不記改元者、此一事亦足想當時隔絶之情勢矣、雖然順逆之跡煥如觀火、余已知此編之有益於世道人心、又喜君之厚於故友、乃序之、

同　跋　　碩果　南條文雄

右大垣藩勤王始末一卷、淺井謙藏君所編纂也、予讀之再三、想見當年之事情、不覺毛髮爲竪、何哉、嘗聞明治元年正月三日官軍聲錦旗出陣東寺、聲威大振、而德川氏兵未至京師敗績當是時大垣藩兵爲東軍先驅、已而國藩反正、無復一人懷異志者、藩主乃上京待罪、遂奉命建功自贖焉、得彈藩之名、到今文武不乏其人、宜哉民庶翕然歲時祭彼忠魂、事死如事生、若反之則其狀果何如乎哉故藩主戶田伯爵特書敕諭之二句於其卷端、使知所先後、可謂其旨深矣、予與淺井君同庚、幼時共受業於海鷗菱田先生之門、先生曾奔走小原男爵父子之間、備嘗艱苦、殆死復生、能遂其志矣、予也今寓東京、屢與君相遇話壘時、若此書之所以成則詳於藤蔭野村先生之序、故不復贅、先生亦君與予之曾所師事也、

* * * * * *

挽藤井宣正師、々宣界勸學之次子也、曾見持贈其所著佛教小史、卷首自署其名、第七句故云、

家庭有訓且通文、更向天涯博異聞、苦熱暮吟恒水月、沈痾朝踏鷲峰雲、結連師友鍼磁引、掛酌古今玉石分、忍見遺編存手澤、西窓落日弔藤君、

挽清水默爾師、々島地默雷勸學之次子也、去年三月發東京留學印度、今茲八月二十日病歿于孟買、

籌村門下久修文、如此異才吾喜聞、況復曾尋乃父跡、孤身去踏西天雲、

殘炎如燬日西沈、電信一行傳訃音、咋哭藤君未收淚、秀而不實慨尤深、

挽高松誓師、々筑後人、安政五年生于三潴郡荒木村淨光寺、曾爲臺灣總督府吏、後再爲僧、布敎于南清、明治三十五年爲福建兩廣布敎監理、今茲八月四日以病歿于厦門、年四十六、諡雲晴院智海、以雲晴爲韻、

南溟八月暑如焚、病後忘身渡水雲、此志凜然長不死、生前何況足奇勳、

風拂頑雲大月明、霖餘最是喜新晴、欽師敎澤眞如此、不怪同人追慕情、

鐘淵紡績會社工場長藤正純君去年六月二十五日擧一男兒、喜甚、冬月設溫室、不使兒觸寒氣、兒頗敏捷、何圖今年六月二十五日兒病歿、乃葬于淺草本願寺、越九月三日余始聞此事、因書二言以弔慰之、詩中所謂楚石四明山僧梵琦也、有和天臺三聖詩之著、

縱有長生理、終無不死人、吾推老楚石、此語可書紳、

七月四日不忍池畔小集即事

滿池荷葉雨聲多、半日淸遊興奈何、欲去躊躇尙思句、風光此處亦詩魔、

* * * * * *

秋のさゝやき

岡しげる

月の光

一夜、月影明らかにして、限りなき淸光、三千世界に流れ、無量の淸韻寰宇の外に溢る。

萩の葉末の露は、小玉の如き身に、輝き滿ちて囁ける語

嗚呼予幸なるよ、數ならぬ身に、溢るゝ銀の如き、月の光りを浴みて、萩の葉末に宿り、咲き亂れたる花に埋る。

予を繞りては又こゝたの虫の音美はしく、夕の歌を奏す

予寢りにつくも、尙惜み空の月は、終夜予を護り給ふなり。嗚呼予如何に幸あるよ。

里の少女子二人、布卷き返へす前、暫く砧の槌を卸して、互に談りける、

妹「見給はすや。暫し憩ひて、かの月影を！」鷄頭の花は、塵を止めぬ、淸き庭面に、小ささ扇の如き影を投げ、桔梗の障子に映りたる影もをかし。父上返りまさは、如何に樂しからめ。

姉「嫌て父上も返りまさん。脊戸畑の芋とりて、今宵も些かの酒溫めて參らせん。此の月の椽に語りつゝ。

芒を分けて流れ來る野中のいさゝ小川、石にむせび、瓊の如

き聲をあげて曰く、

松林濃き小山の麓を、馬子の唄きゝつゝ繞る時も、黒き岩にむせびて碎くる時も、月影常に予か上に輝きて、予を送る。里に入りても、猶ほ予を捨てず。芋洗ふ淀にも、布晒らす岸にも予は心安らけく、清きわか歌うたひつゝ流るなり。かくて行く手を沓に、月影予を守るべし。嗚呼幸なる哉や。

余之等の喜びの聲を聽きつゝ、此夜月下に一人逍遙ひて、銀線束ねたるか如き光に浴す。思ほんば此偉なる月の光や、吾か佛のみ光に肖たる哉。

薄

三日月も吹き飛ばされなん許りの野分に、野中に立てる喬松も枝折れ、幹裂け、凄しき聲を擧げて怒號す。くゝり付けたる萩は籬ながらに吹き倒され、紫苑鷄頭、昨の面影を止むるものなし。曉近く荒ふる魔は其手を收めて、海のはてにや沈みけん、影だも止めず。一叢の薄小庭の隅に、戰く面をもたけて、四圍の友の皆倒れ伏せるを見、聲もたはゝに同じ友からに囁きぬ。

強き松、剛き鷄頭、果して幸なりや。弱き吾等の果して不幸なりや。吾は疑ふ、吾か友の裂け、折れ、はた倒れたるは、多くは彼等のみめ美はしき迄丈高く、姿強きによるにあらずやを、弱き果敢なき吾等は、凄しき野分の呪ひを免かれて、今朝再び恙なく起ちて、溫き手をとり交はすなり。強きは果して幸なりや、弱きは果して幸なきや。とまれ吾かともから、此曉方、弱き吾等を祝せさらめや。！

秋の句

素水

遲れ飛ぶ一羽の雁に嵐哉
月の夜の桔梗に居ていとゞ啼く
水底や竹の枵葉に放ち魚
我か影に蕎麥の花散る月夜哉
草の家の殘暑や木槿萎みけり
松露得て月の眞砂路歸るなり
朝顏の白き蕾や稻光
月がさす片頰白き踊かな
踊る哉果ては鼎もかぶるべく
過ふ戀の鯛の道や葉鷄頭

秋季雜咏

吟二

雁金のなくや砧に更くる夜
畦を召す庄家の庭や毛見の衆
鳴きながら鹿渡るなり秋の水
萩に埋もれ經讀む小さき庵哉
落ち栗の流れもせさる野川哉
話しつゝ砧打ちつゝ姉妹かな
紫にならて枯れたる茄子哉
鰤寄らぬ日和や舟の辭心地
山谷より今戸に漕くや月見船
富士を脊に鰤網引く浦曲かな
川面に低く穗蓼の咲にけり
幾反の布を晒すや秋の川

秋十句

曉村

秋の夜の遲く飯食ふ灯哉
酒買ひに行くにも引くや鳴子繩
朝月に脊戸の桃の葉ちり初めぬ
道問へば啞や落穗を拾ふ人
庭に出す木賊の鉢や星月夜
就官の今年初めて菊作
墓詣昨夜の野分を問ひ合へり
鰤引く人山波にくづれけり
葉鷄頭に風吹いて鷄淋しけれ
紫苑咲いて鯉飼ふ池の凋れにけり

旅行雜吟

臥松

瀧車
短夜を東海道の月見哉
嚴島
廻廊の赤きほの見ゆ夏の雨
瀧の音皷の音も聞えけり
はすかいに夕立すなり大鳥居
長府
九州を見ながら夏の潮湯かな
壇の浦
百千の陽炎とぶや壇の浦
下の關

門司馬關船萬艘や盈の月
海　上

帆懸舟夏の月夜にさすらひぬ
須磨浦

この夏は須磨の句竟に得ざりけり
長　府

父母の如き二つの珠島のけしきゆかしも豊浦の海
海　上

繪工か筆も及はぬ瀬戸の海や筑紫の山に入日さす見ゆ

新刊紹介

文學博士松本文三郎著
佛教史論第一編　佛典結集　本郷文明堂

由來印度の佛教史を研究したるもの尠しとせず、然れども多くは材料の如何を問はず、説の可否を論せず、唯古來の傳説を其まゝ叙述したるに止まり、印度史上に生氣を添へたるもの實に稀なり、著者松本博士は印度史を研究すること茲に多年、從來の研究法を一變して深く資料の淵源を探り、取るべきものは取り、捨つべきものは用捨なく排斥し、且つ誤謬を指摘し亂麻を判つて思想發展の跡を考へて曠朧たる印度佛教史上に光彩を添えたるは博士の勞顧る多さすべき也、此書即ち印度佛教史論の第一編として、先づ佛教史上の一大顯象たる佛典結集法の顚末を公にせらる。抑々佛典結集の事たるや、啻に佛教發達の跡を尋るのみならず、古人が佛陀の遺法を遵守するに於て其用意の慎密を窺ふに足るべきもの、佛教研究者に取りては洵に重要の事柄なり、本書收むる所、王舍城結集、吠舍離結集、阿育王の事蹟、迦膩色迦王結集等にして、其間鋒利なる評論を施しまゝ泰西諸家の説を交へて以て眞實を判じ史眼炬の如しと謂ふべし、一讀人をして雲霧を排して晴空を望むの思あらしむ。吾人は速に其完成を祈る。（定價六拾錢）

小野藤太著
日本佛教哲學　同　上

著者曰く、佛教は廣汎雜駁なりと雖、概して之を云へば智的宗教とも稱すべく、從て其中には吾人の智識慾を滿足せしむるに足るべき哲學的考察少なからず、かゝる廣汎雜駁なる所説を學問的に、批評的に、組織的に其哲學的内容の價値を明にし、其契合點を捉へて佛教の根底を探り、各派の特徴を詳にして其異同を察して一見佛教全体の眞相を知らしむるは本書の主眼にしてこれ佛教哲學と名けし所以なりと、著者は曾て高野山にありて佛教を研究されたる人なりと云ふ。本書の内容を伺ふに第一編に於て先づ哲學、科學、宗教の性質を示し且つ其關係を明にし、第二編は印度、支那、日本佛教の教理發展を述べ、第三編は教相の判釋を説いて其優劣を比較し、第四編佛教汎論として宇宙論、人生觀、解脱論を提けて佛教全体を通論し、第五編佛教各論として各宗の教義に就て之を宇宙、人生、解脱の三方面より觀察して其大要を述べ本書の結尾となせり、第四、第五の二編は著者の意を注きたるものなるべく、所論敢て斬新といふにあらざれども、其主張まゝ見るべきものあり、第二編教理の發展を叙するに當り、明治の佛教として著者の唱道する新佛教を加へたるは一異彩を放てりと云ふべきか、否か、而して著者は終に臨みて、各宗の合同は斷して不可なりとして、各自優勝劣敗に任し、各自其特徴を發揮するに如かずとなし、轉て新佛教の如きものが勢力を得るに至るか待つべしと結論せられたり、余輩其當否は知らず、佛教の研究をなさんとするもの本書を一讀せば其裨益する所多かるべきを信ず。（定價六十錢）

哲學館事件と倫理問題　編輯　小石川鷄聲堂

ミュアヘッドの倫理説よりして、一時學界の波瀾を惹き起したる、所謂哲學館事件に就て、普く學者識者の討論研究したる所論を集めて册子となしたるもの、該問題の如何に社會の視聽を動かしたるを知ると共に近時の倫理思想の根底か奈邊に基礎を措くかを窺ふべし、編輯亦体を得て讀むものをして飽かぬ思あらしむ、（三十五錢）

佛教文藝十二傑　淺草佛教社

佛教文藝の十二傑とは、曾て投票によりて月桂冠を戴かれたる南條博士、村上博士、大内青巒、高津椋隅、安藤鐵腸、加藤咄堂、高島圓、等の諸氏の評論と合て自ら物せられたる作例を掲けたるもの、其内容をさらけ出したる虚僞士の赤裸々たるの眞面目を窺ふを得べし。（四十錢）

清澤滿之著
修養時感　廣布森江書店

曾て無盡燈紙上に連載せるもの、先生今や亡しと雖も、本書を繙きて親しく教訓に接するの思あり。（三十錢）

加藤咄堂著
大乘佛教大綱　同　上

華嚴、天台、眞言、禪、淨土、眞宗、日蓮、時宗等の教義を直截簡明に論究したるものにして、此一卷の書よく日本の特色たる大乘佛教の大綱を了解するを得べし、著者本書を公にするまで三星霜を閲して且つ幾度か稿を改めたりと云ふ、以て本書の價値を知るを得べし。（三十五錢）

小波山人編
骸骨島　東京博文館

小波山人のお咄嘲に成功したる今更いはずもがな、本書は世界お伽嘲第五十編として北米の口碑傳説に基いて例の輕妙なる筆もて抽かれたるもの、外に岩戸破の一編を收む、趣味深く實益の多き家庭の教訓として少年の良慰藉也、今やお伽芝居流行を見るに至る、山人の功決して没すべからざる也。（定價七錢）

報道一束

◎秋高く馬嘶くの時、日露の風雲益々急を告げ來り候。硬骨の政客は内閣の腰弱を、もどかしく思ひ居り候、併し迚も平和の手段にてはゆくまじとの事に御座候。雨か風か、一道の殺氣天の一方に横はるやうに感ぜられ候。

◎姉崎博士等の發企にて耀牛會を組織し、故高山博士の爲めに左の如き紀念事業を舉ぐる由に候。

一、耀牛に關係ある地（多分線倉）に紀念の庭園を開く。
一、園内に紀念標を建て及び本會の家屋を建築し、之を耀牛關係の書類を蒐集する場所及び本會々員の集會所に宛つ。
三、龍華寺なる耀牛埋骨地の造園をなす。

右の事業を賛成し、入會出金せんとする人は小石川指ヶ谷町七八、姉崎正治宛通知せられべく候。

◎安藤鐵腸氏主幹の下に施本用として、毎年四回極めて平易にして趣味深き佛の教を謠ひたる小册子を發行する由、定價は一部貳錢にて淺草區松清町圓照寺内曉星社より發賣の由に候。

◎本派本願寺法主大谷光瑞師は目下須磨に於て佛蹟探險の著述に從事致され、餘程大部のものにて容易には脱稿せざるべしとの事に候。

◎南條博士は滿三ヶ年を期して梵語字書の編纂に從事し、目下其一部を脱稿したるが尚同博士は梵文一切經と漢文一切經との對譯をも著述さる由に候。

◎久我從一位の薨去　去月廿一日より大腸加答兒にて病罹にありし從一位久我建通公は、こたび八十九の高齢を以て去る廿八日前九時薨去相成候。超へて本月四日芝青松寺にて森田悟由禪師の導師にて葬儀執行され、遺骸は同夜瀧草にて京都紫野大德寺に埋葬致され候。老公の絶筆と稱すべき詠歌は左の如くに候。

河水久澄
五十餘川なかれのすゑも澄みにけり
遠き神代をみなかみにして

鑛山
君か代のさみ榮え行くしるしには

こかれ花さく山を多かる

◎耶蘇教一派の人々の發起にて今回東京傳道學校を設立したる由。其目的は布哇其他の海外傳道を始めとし凡て傳道に志すものを養成し、傍ら全く一身を傳道に委ねるに至らざるも、深く基督教の眞髓を極め之が爲めに盡さんとする者に、實際的、信仰的神學の教授を爲す由に候。

◎參謀次長田村怡與造氏は本月一日逝去せられ候。國家多事の今日斯人を失ひたるは朝野のひとしく嘆聲を發する所に候。

◎夏期中暫く休み候日曜講話は九月十三日より開始致候。毎回共聽衆非常に多く室外に溢れ候。

我に降れる佛陀（九月十三日）　曉鳥敏
信仰行程に於ける歸郷と再遊（同上）　近角常觀
我感謝（九月二十日）　佐々木月樵
信仰の地盤（同上）　近角常觀
パルナードの話（九月二十七日）　楠龍造
自然の法則（同上）　近角常觀
信仰至難論と至易論　曾我量深
純潔なる信仰　近角常觀

而して先月最終の日曜日に於て例の如く信仰談話會を催し、夏期中の實驗談ありて益々信仰の妙味を感ぜられ候。

◎本號社說に掲け候通り、愈々求道會館設立の事に相成候間何卒有志の方は一臂の力を添えられ、一日も早く其目的を達せしめられ度候。

◎覺王寺日運寺創立に付ては多くの反對者ありて容易に經まらざる由なるが、先づ本派本願寺斷乎として調印を謝絶致され候。されば之に倣ふて眞宗高田派、同木邊派も調印せざる可く京都臨濟宗七派、永源寺派、黄蘗宗、日蓮宗も創建に贊同するや否やは未確定なるが。日蓮宗の如きは臨濟各派及び黄蘗宗にして調印を承諾せざる限りは同宗も又謝絶するの意嚮の由。又臨濟宗にては此程京都建仁寺に於て南禪、建仁、東福、天龍、相國、妙心、大德の七派及び永福寺派、黄蘗宗等會合して調印諾否に係る最後の協議を凝らしたりと。尚同寺建立に贊成調印したるは左の各派なりとの事に候。

眞宗大谷派、同興正寺派、佛光寺派、出雲寺派、天台宗、天台宗寺門派、同宗盛派、眞言宗、淨土宗、臨濟宗建長寺派、同宗圓覺寺派、曹洞宗、眞宗誠照寺派、三門徒派、山元派時宗、融通念佛宗、法相寺、華嚴宗、眞言律宗等

◎久保田讓氏新文相の椅子に就き候爲め、自然文部省廢止の議は立消の姿に相成候。因に云ふ、行政整理の結果として府縣廢合の噂も有之候。

◎去月廿四日の祭日をトして、求道學舍の遠足會を催し候先づ新井の藥師に詣て郊外の秋色に飽き且つ栗飯の馳走に飽き。路を轉して目黑の不動に詣し、滝に入りて秋の水の冷なるを試み。ろれより路を高輪に取り、新橋に出てゝ、日比谷公園に入りて夜色を賞し、街鐵に乘りて舍に歸りたるは八時を過き申候。一日の清遊百年の憂を忘れたる心地致候。

◎先號報道致置候眞岡氏の住所四日市としたるは、三日市の誤に候。粗漏の罪を謝し申候。

◎途上舊妻の襲撃に遭ひ候某博士も有之候。嫉妬の裏には刃をつゝみ候とは洵に空恐しき世の中に候。

◎社會主義の人々は盛に非戰論を唱へ居り候。

◎秋十月に入りて冷氣益々加はり候。幸に道友諸兄の健在を祈候　不宣

龍ケ崎の一日（常陸）

劍虹生

月の二十日朝霧つく雨を冒して吾は龍ケ崎へ向ふべく上野停車場にかけつけぬ。舍を出る時はすでに日曜講話は始れり。近角兄はそをすましてのち參らるべしとのことゆゑ吾のみ獨り列車の中へ身を横へぬ。乘合の人僅かに數人にていかにも寂しかりき。折りしも雨は斜に車窓を打つて風さへ加はり空は濛々としてすみ渡る秋の景色を眺め得ざるはたしきこゝちせらるゝ也。吾は つく〳〵 思ひぬ、社會の半面を載せて滯りなく目的地に駛せゆくものは瀛車の力なるを思ひぬ。中には富める人、貧しき人、病める人、罪の人、若き人、老いたる人悉く些の隔てなく載せゆくものはげに瀛車なり、例に取るもおこがましき事なれども、よくも佛陀の一切衆生を救濟して乘て玉はぬとに似通ひたる事よと思ひぬ。瀛車の我孫子驛に着したる頃ひは雨も小降りとなり、乘換驛なればにや、降る人、新に乘る人などありて稍賑ひぬ。瀛車は間もなく佐貫に達せり、我は下車して更に龍ケ崎に通ふ輕便鐵道なるものに乘る、鐵道には相違なきも一体の構造何となく簡單にして滑稽らしく感ぜり。速力は馬鐵よりも稍々優れりとすべきか、此間二十分間を費せり、里數は二哩强なりと云ふ。停車場には伊藤文學士と石津純識の兩氏すでに我を待ち居られたり、はや正午を過ぎし事とて直に會場なる般若院に導かれぬ。昼夜二回の演說會催すとの事なり、午後二時開會と云ふに時間は迫されども更に人影さへ見えず、二時半頃より五人、七人と追々集りて來て三時と云ふ頃堂に滿ちぬ。開會の辭終ると共に吾は今日瀛車中にて感ぜし事より說き起し人の人たる道の履むべき事を述べて壇を下る、近角兄はすでに着し居られたり。伊藤兄は教育と宗教との關係に付て一時間餘に亘る長廣舌をふるはれたり、はや五時を過ぎぬ、秋の日脚短かき事とて暮の色は遠近より傳はれり。近角兄が演壇に立ちし時は用意の燈びに點火されたり、畫の演說は夜に跨りぬ。國民自覺の時機。今日にあることをいと熱心に述べ自覺の最も必要なるを說き、佛陀とは要するに大自覺せられたることを語り終りて是にて畫の演說は終りぬ。それより晩餐にとて和久良家に導かれたり、伊藤兄より此地風俗の事共きゝ抔してやがて夜の會に出席したり。聽衆は畫と大差なく青年より老人の方多きやに見受けたり。余は社會主義の事少しく述べぬ、さけば此地にては東京より社會主義の木下、幸德などの人々がはや二三回も來て演說會をひらかれたりとの事なり。田舍の人には耳新しくきこゑたらむと思はれたり。余は更に我等の生涯に付て賴むべからざるを說いて靈界の力によるべき事を述べぬ。宗教心の極めて幼稚なる土地とて左まで感情を得與へざりし如し、一は不法の致す所と思いて願みて懺悔の念に堪へざりき。續て伊藤學士は畫の題にて輕妙なる辯もて時としては聽者の笑をひくなど縷々一時間餘に亘りぬ。最後に近角兄は理想の社會と題して、人生の淺ましき事より說き起して理想の社會を實現するには佛陀の境界に安住せざるべからざるをいとも熱心に說き了りて壇を下れり、是にて閉會を告けぬ。宿に歸りてくさの〳〵物語して寐に就きしは十二時の聲をきゝしと覺ゆ。

意外に朝寢坊したりと。近角兄の言葉に打ち驚き吾は目覺めぬ。近角兄の夢物語に打興しつゝ、起き出て庭の面を眺めやれば、夜來の雨にて萩の色いたく褪せたるあはれに見ゆ。只澁柿の實のみ累々として赤さが目さむるこゝちせらるゝ今日も雲の脚急にして雨模樣なり、近角兄は宿のあるじを招きて親鸞聖人の御舊跡なる鹿島神社の道筋を訪ひ抔する中有志の方々四五人訪ひ來れり、此地固より法緣に薄きも寺は眞言、曹洞を合して六ヶ寺ありと云ふ、されど眞宗の寺院は一宇もなしとの事なり。近角兄は有志の需に應して揮毫せられたり、其中午に近きたり中學校の伊藤兄よりすゞ來られよとの事にて余と近角兄は腕車にて赴く。遣澤校長の案内にて校舍を一巡す、校は龍ヶ崎の東端小丘に位して自ら小天地をなし、前は万頃の水田を抱き遙に富岳の玲瓏を望むべし。後は葱々たる林丘を負ひて幽邃閑雅洵に其所を得たりと云ふべし。近角兄は英のハローの中學校に似たりとていたく賞讃せられたり、校舍は新築半にて今尙工事中なり。生徒は四百名に近く一体學問の發達遲々たれども學生概ね質朴にして勤勉の風ありと云ふ。午後よりは校友會の大會を開きて近角兄一場の演說をなす事となりぬ、且つ演說後近角兄は土浦より霞ヶ浦を過きて鹿島神社に詣つべしとの事ゆゑ、吾は滊車の時間にれくるゝを以て同校を辭し、有志者と別れて再び輕便鐵道にて佐貫に着し、間もなく上野行の列車に搭せり、細雨糸の如く冷氣身に泌む、車中寂寞として只一人の乘合あるのみ。吾は近日第四版に付すべき『信仰の餘瀝』の誤字を訂正しつゝ讀みゆきて、溫なる靈泉を心の渠に漂ねつゝ上野驛に着きぬ。夕闇はすでに上野の森を包みて雨はます〳〵ふりしきりぬ。此行吾をして多大の敎訓を與へぬ、終に臨みて伊藤、石津、葛原、秋田、九枝有志の諸士より深く歡待を受けたるを謝す。（九月末の日認む）

羽陽の秋

拜啓小生も隨分自ら驚く程筆無性に御座候何歟認めて投稿致度と考へは考ながら田舍へ參り候てより中央敎界の大勢には勿論暗く筆も驚くべく廻らぬ樣相成ッイ〳〵御無沙汰に打過ぎ候ドーモ大勢といふものはおそろしきものにて三十餘年物質的文明に心醉し來り候邦人も唯々物質の文明皮相の開化のみにては內心何となく不足を感じ候ものにや近來信仰を求むるの聲が諸方に高きは大兄の御熟知の通なるが當山形縣などは元來無敎地と申しても宜敷程の地なれども近來は大に宗敎界に活氣を負ひ來り候哉と存候大兄が當縣へ御來遊に引續き大內居士植村文學士等の來遊ありしは實に燎火に油を灌き候有樣に有之候小生の如きものすら折々佛敎演說に引張り出さるゝの形勢と相成候は最喜はしき次第に御座候餘りの御無沙汰を致せし爲に大兄御來遊後當市近傍の敎況概略御報申上候間政敎時報に若し餘白も御座候はゞ六號活字にて一隅御掲載被下度候

八月卅一日に當市專稱寺に故清澤師の追吊會を相催し候は東谷君が既に『精神界』誌上に報道被致候通故今は略し申候。唯々同會にては比較的當地にて有識者と呼はるゝ人々が從來餘り門をくゝる事を好まざりし寺院へ來會せし一事は何程か滿足に値する事と存候其後先月の始めに中山理賢師來遊被致願

重寺（原精一師住寺）に於て一週間程法筵を開かれ候餘程好評にて參詣も多く法益を與へられ候事と存候、當市より二里程西方に當りて山邊町と申小都會有之候此地は當市よりも一層無佛法にて從來佛敎演說などは先づ無之土地なりしも角張月峰師よりの手續にて曩に一回佛敎演說開かれ候由なるが去月十一日小生は堤鳳鱗角張月峰兩師と共に參り演說相開かれ漸く一團体を組織する事と相成候其十三日は又角張君と共に米澤に參り候同地は御承知之通舊藩時代には最も儒敎を奬勵せられし結果として眞の無佛法ともいふべき土地なるも先年觀興庵（臨濟宗寺院）主木村師の盡力にて米澤佛敎青年會なるもの興され候處其後一時衰頽して殆ど全く瓦解致居候處貴兄の來遊もあり殊に八月一日より大內植村兩氏來米して佛敎夏期講習會相開かれ候より少からず同地人士を舊興せしめ青年會を再興することゝ相成同會組織五週年祝賀會として大演說を觀興庵に開かれ小生と角張君が招待を受けて參り候當日來會者は左のみ多數にはあらざりしが中學校高等女學校の敎職員諸氏斡旋せられ兩校の生徒のみにて九分通を占め候事は小生等も大に快心に存じ候次第に候當時女學生の意外に多數來會而も熱心に謹聽せしを悅び此機を逸せず女子部を別立すべしとの議興り小生等も大に慫慂仕り來候處愈木村師等の熱心が物に成り婦人會が組織せられ長沼德水師の淨圓寺に於て開くとゝ相成り宗敎々育衞生等の談話を爲すととなり此頃堤鳳鱗師同地へ出張を幸機として廿七日に發會の法話を請ひしといふ是も喜はしき報道に御座候

其他當市は唯今は知事書記官典獄及師範學校中學校高等女學校の敎職員等大概皆佛敎家故大によろしく候市中にも堤角張兩師丹精の山形佛敎同志會も好景況にて小生等が米澤へ赴きし同日（十三日）大演說相開かれ候

曹洞宗の三浦良覺師の許へ坐禪に參り候人も多く今度又碧巖の提唱が始り候當地の上流續々參廳被致候成可なら知事の官宅にて開き度と周旋致居らるゝとの事に御座候我中學職員なども此方に出掛ける人多く御座候原精一師の報恩婦人會益盛に候西置賜郡にては井上豊忠師東置玉郡にては高橋禪龍師布敎熱心に隱れなく候併しこれ等の事は小生も一度其方へ遊びて後又々御報道可申上候

小生も田舍へ引込み何の樂しき事も無御座候間最早大悲の如來より外に我を慰め呉れ候もの無し何とか之を修養の助緣と致度と存居候先はこゝらで擱筆仕可候

十月一日　　山形市にて　　本多高陽

獨乙より

貴兄の纖靜觀錄おもしろく拜見して居ます、どうもちさむづかしいことはないか、もつと平らに云つてもらふと有難い、平假名のわき假名をつけるといふ事は其等の漢字の讀み樣をしらぬ人の爲めにするか、もしくは或特別の語であつてこれをつけなければ誤解を來したり、わからなかつたりするからことに注意の爲めにするか、何れかであらふ、後者ならばよいが前者の故を以てするものとすると漢字にわき假名がなければわからぬ程の人があれを了解し樣とは思へぬ、だから体裁上わき假名のあることに內容及語の用法上にむづかしきペクリフのある事には、この雜誌編者が思つて居る目的中に矛盾がありはせぬか、先きに言文一致の事をすゝめて用ひられかゝつたのは大きによろこばしいが、ポピエラリチを貴ふ邊からばもう一ツ以上の注意をしてほしい、又余計な御世話をやいてすまないが氣

付た事は申した方が僕の氣はすむ。

松本博士の研究はいつもながら敏密で廣遠で大いに敬慕する、風流才子的の色を文にあらはさず、誇張輕忽の跡を研究發表上に示して居ないのは甚だ貴く思ふことにこれに對する南條博士の答は温乎たる師の姿なまのあたり見る樣であり、又そのおくゆかしい心と深密たる思想とが現はれるのは實に有難く感ずる、政教時報大に貴くなつたと思ふ、結構〳〵補君の論理の明快なるもひそかに欽慕する。

本多兄が山形縣立の中學校にいつたとか、それでわかつた、先號に山形の佛教のことがかいてあつたのが。

月見覺了君によろしく我が郷里にかへられるのと僕が渡歐する爲の送別會とを同時に精養軒でもよほされ、其節には清澤先生が僕のそばで食をとられた先生今はなし、嗚呼〳〵。

日本の儀館によほどはけしき由、こまつた事あはれな事、

蹴馬法王崩ずてあとがまの選擧甚だやかまし、

時々ははがきでも下されたい。

松本君はもつともよくたよりしてくれる人。

マールブルヒは小さなところ、どちらむいても山で桑をつく、もつとも賑かな町之をシタインウエーヒと稱してごろ〳〵石かしきつめてあるしかも板で両側の相せまる事甚し、ラーン河至て小さく景かそへない、御機嫌よう。景山生

求道會館設立趣意書

現時社會の大勢を察するに、國民に眞摯なる氣風頗る乏しくして、益々信仰の必要を感じ。一般に道義の制裁弛み去りて、人皆嚴格なる實行を想ふ。此に於てや青年學生にして眞面目なるものは、確實なる信念を攫まむとして胸中幾多の苦悶を抱き。社會實務の人にして、志操清淨なる人は、其理想を實現せむが爲に、人生問題の解結に辛酸を嘗めざるはなし。嗚呼信仰の饑渴現時の如く劇しきはなく、求道の志此の如く切實なるは未だ嘗て見ざる所也。

昨年已來、聊か此時運の必要に應せむとする微志より、先輩の企てられし跡を引き繼ぎて、一方には求道學舍を設け。此等の道を求むるの人々の寄宿に充て、寢食を同じくして共に實踐躬行に勉め。又一方には日曜講演を開きて眞面目なる人々と共に心を潛めて信仰の問題を講し、互に心靈の修養に從ひしが。幸に佛陀の冥祐と、師友の同情とによりて其期する所空しからず。學舍は常に滿員にして幾多の申込に負き。假會場に充てたる居間は常に狹隘を訴へて求道の人々を入るゝの餘地なし。此に於てや止むなく、懇切なる道友の勸告に從ひ、學舍を擴張し、會館を設立して以て焦眉の急に充てむと欲す。幸に篤厚なる先輩の指導に從ひ、忠實なる親友の贊助を仰き、着實なる實行によりて漸次其結果を擧けむこと是實に不肖の至願也。

從來首都に於て佛教徒に屬する會館の設なく、其不便を感すること一日の事にあらず。而して屢々計畫せられて、未た容易に成效の曉に達せざる所以のものは、蓋し其規模大にして完全を期すればなり。故に先づ現時の必需に應すべき適宜の會館を設立して、漸次其大なるものに進まむことを欲す。是先づ本會館の建設を企圖して佛教者一般の需要に充て且つ清潔なる社交の中心に供せむと欲する所也。予西遊の際、泰西青年會の組織及會館の設備等を初めとして、幾多の社會的施設を詳細に調査し來りて、此等の事業の我國佛教者の手に成らむことを望む實に切也。本會館建設の如き若し燎原の一燄火たるを得ば幸之に過くるなし。冀くば四方同感の諸士不肖が微衷を諒察せられ、協力贊助し玉はらむことを謹で白す。

一、喜捨金爲替振渡局は本郷森川町郵便貯金爲替取扱所宛若くは第一銀行宛御取組み奉願候

一、爲替受取人宛名は東京本郷森川町一番地求道學舍近角常觀宛にて御送附奉願候

一、喜捨金御送附被下候節は直ちに發起人より受取差出し月々本紙上に於て報告可仕

一、喜捨金は直ちに第一銀行に預け込み可申候

明治三十六年十月　發企者　近角常觀

贊助者（いろは順）

理學士　稲葉昌丸　　池山榮吉
理學士　今川貶神　　石川成章
淺草銀行頭取　今井喜八　　西澤善七
文學士　本多辰次郎　　文學士　朝永三十郎
文學士　常盤大定　　大内青巒
文學士　大草慧實　　監獄事務官　小河滋次郎
文學士　萩野仲三郎　　代議士　岡田治衛武
文學士　和田鼎　　醫學博士　片山國嘉
文學士　柏原文太郎　　文學士　吉田賢龍
文學士　吉田靜致　　文學博士　高楠順次郎
文學士　月見覺了　　文學博士　南條文雄
帝國大學講師　村上專精　　侯爵　久我通久
法學士　野田藤馬　　文學博士　上杉文秀
文學博士　帝國大學講師　前田慧雲　　文學博士　松本文三郎
文學士　眞岡濯海　　文學博士　藤島了穩
文學士　藤井健治郎　　文學博士　姉崎正治
養育院幹事　安達憲忠　　曹洞宗大學林長　秋野孝道
文學士　普通學務局長　柳澤政太郎　　齋藤唯信
文學士　佐竹觀海　　文學士　酒生慧眼
境野哲　　櫻井義肇
文學士　第二高等學校教頭　三好愛吉　　島地默雷
島田蕃根　　文學士　新保德壽
杉村廣太郎

（末完）

清澤君奬學資金第一回報告

一金壹圓　篠原兼司殿
一同貳拾圓　吉田賢龍殿
一同拾圓　常盤大定殿
一同拾圓　虎石惠實殿
一同八圓　小原一朧殿
一同五圓　高瀨武二郎殿
一同拾圓　淺井秀玄殿
一同五圓　楠龍造殿
一同五圓　安藤洲一殿
一金拾圓　藤岡勝二殿
一同壹圓　八田三喜殿
一同壹圓　太田秀穂殿
一同五圓　荻野仲三郎殿
一金貳拾圓　田中惠輪殿
一同壹圓　平出幸丸殿
一金貳拾圓　南條文雄殿
一同貳拾圓　澤柳政太郎殿
一同貳圓　山口基千代殿
一同壹圓　峰百合子殿
一同壹圓　吉田勇子殿
一同壹圓　結城善龍殿
一金參圓　赤松大勵殿
一同參圓　湯口溫雅殿
一同參圓　中川惠輪殿
一同壹圓　平出幸丸殿
一金壹圓　篠原兼司殿
一同貳拾圓　吉田賢龍殿
一同拾圓　常盤大定殿
一同拾圓　虎石惠實殿
一同八圓　小原一朧殿
一同五圓　高瀨武二郎殿
一同拾圓　淺井秀玄殿
一同五圓　楠龍造殿
一同五圓　安藤洲一殿
一金拾圓　藤岡勝二殿
一同壹圓　八田三喜殿
一同壹圓　太田秀穂殿
一同五圓　荻野仲三郎殿
一金貳拾圓　田中惠輪殿
一同壹圓　平出幸丸殿

一同五拾錢　佐藤忍殿
一同拾圓　秦敏之殿
一同五圓　西村謙三殿
一同貳圓　橋本唯三郎殿
一同壹圓　廣瀨歸芳殿
一同貳拾圓　近角常觀殿
一金五拾錢　松任銀二郎殿
一金貳拾錢　清神信次郎殿
小計金參百四拾四圓貳拾錢

一同拾七圓　月見覺了殿
一同貳拾圓　稻葉昌丸殿
一同貳拾圓　今川覺神殿
一同拾五圓　春日圓城殿
一同拾圓　旭野慧憲殿
一同七圓　河崎顯了殿
一同貳拾圓　梅原讓殿
一金拾圓　石川成章殿

◎轉居
小石川鶯籠町廿七、
池山榮吉

日曜講話
毎月日曜午前九時より開く
求道學舍
本郷森川町一

閑文字

劍虹

◎草深き駒込の邊、人跡稀にして叢に塵寰を離るゝ處。風雨幾星霜や經む、軒傾き壁あらはれ、庭前落葉うつたかくして、青苔獨り其綠を恣まゝにす。主人念佛三昧少しも意に介せざるものゝ如し。朝、人の門を叩くあれば自ら内にありて不在なりと稱す。佇立耳をそばたつれば幽かなる稱名の聲外にきこゆ。人怪みて其所以を問へば答らく、吾に先づ諸佛の先客あり、如何ぞ先客をすてゝ後の客に接するを得むやと、客深く其意を諒として去れりと云ふ。主人とは誰ぞ、無名の老女傑也、其性行をつゝみて人に語ることなし、强て之を問ふも笑て答へず。女傑幼にして佛門に歸依し、今尙日課として二萬遍を唱へて一日も怠ることなく、人の子を養ふこと限りなし。財囊を傾けてあらむ限りの慈善を施すと雖、猶以て足らざるを悔とす。信念の鞏固なる近時稀に見る所也。世には名を求めむとして慈善をなすものあり、少しくこの女傑に顧みて可也。今は女傑の名を逸す。

◎無窮堂主人書を寄せて曰く

前號の政教時報に小生の住所四日市と有之、是は大なる間違にて三日市に候。

三日市一つふやして四日市
一つちがへは大違ひなり

の名歌を（恐くは日本一の）を口吟候間閑文字に掲載し、宜しく叩頭再拜相成度候。

劍虹曰く、謹て茲に叩頭再拜す。主人幸に意を勞する勿れ。

清澤滿之君奬學資金募集

物質的文明の潮流激甚なる間に於て敢て身を宗教界に投して國民の精神的感化に從事せられたるもの吾輩故清澤滿之君に於てこれを見る君が明治二十年文科大學を卒業せられてより宗教界に貢献せられたる所の少からざるは更に多言を要せず若し向後なほ數年の間君か英邁非凡の資と多年修養の功とを以て世の青年を指導せられたらんには能く物質的偏傾の弊を矯むることを得たらん然るに君が學德益す老熟の境に進みて君の感化愈々大ならんとするの際忽然として逝かれたるは啻に君の爲に哀むのみならず亦實に我社會の爲に遺憾とする所なり乃ち茲に清澤奬學資金を募集し之を分て東京帝國大學と眞宗大學とに寄附し今後宗教學を專攻せんとする學生の學資に充て以て聊か君が永久の紀念に供せんとす謹みて同感諸君の贊同を希望す

御出金及其御申込は東京小石川區表町澤柳政太郎東京巢鴨眞宗大學南條文雄の内一名にあて便宜御送付下されたく郵便爲替は小石川郵便電信局拂に願ひ候　御申込期限は本年中と致候

明治三十六年七月

發起人　一木喜德郎　今川覺神　稻葉昌丸　早川千吉郎　近角常觀
岡田良平　大草慧實　和田圓什　吉田賢龍　南條文雄
村上專精　上田萬年　梅原讓　澤柳政太郎

右の趣旨に基き同師の感化を享け若くは德澤を慕ふの人々は冀は贊同の意を表し玉はむことを猶便宜上本會宛御送金被下候へは取次可致候

大日本佛教徒同盟會

文學博士 前田慧雲師著

大乘佛教史論

本書は大乘佛教の源流を歴史的に論述した者にして議論斬新考證該博なり卷尾に大乘佛說論者も必ず讀を附錄佛教史を研究せんとする者は一讀再讀す可し大乘佛說論者も亦必ず看るべし非佛說とせり

▲初版賣切再版出來

△菊版三百三十頁餘
△上製價九拾錢稅十二錢
△並製價七十錢稅十錢

文學博士 井上哲次郎先生著

◎釋迦牟尼傳 第九版

上製價八十錢稅十錢
並製價六十錢稅八錢

文學博士 松本文三郎先生著

佛教史論 第一編 佛典結集

△九月五日發行
△菊版二百八十頁餘
△上製價八十錢稅十錢
△並製價六十錢稅八錢

最古の紀傳により佛典結集頭末を詳叙し後代撰述の乖違竄入を指摘し東西學者の妄說を論破し眞贋立ろに之を辨せしむ附錄には最緊要の印度史料阿育王碑文一切を翻譯し錫蘭佛教の由來を記述し古代印度王統年代を比較對照する等皆是學者の珍とする所なり

發行所 東京電話本郷四九一九番 東京市西六條 文明堂 興教書院

和融誌

九月五日（第七卷第九號）發行

▲菁物館 森大狂
◎禪宗の教理に就て 三界一門樓
▲冷暖自知錄 飯坂圃收
◎博言學的素養の必要 廣井辰太郎
▲苦熱錄 鳥石生
◎人生と宗教 內田融
▲洞上國晉一班 峯玄光
◎孔子道德に就て 高原操
▲佛教衰滅の三因 澤北
◎唯物唯心論と我法二空 嶺崎
▲拳國錄 尺蠖生

▲一冊金拾錢一ヶ年壹圓貳拾錢

麻布曹洞宗大學林內
發行所 和融會本部

家庭

定價一部八錢
半年四十二錢
一年八十錢
郵稅不要

十月五日（三ノ十）發行

目要

▲本領
◎家庭に於ける男女の位置 記者
◎冥鑒 同
◎佛教家庭の經濟法 同
◎警覺 同
▲家事
◎赤子の啼泣 上
◎西洋料理 上
◎挿花のはなし 上
◎衛生問答 上
▲譚苑
◎綺田まうで 古川生
◎哀歌（下） し
◎萩と格（お伽噺） さん
◎小川物語（當撰） 稻村露園
▲講話
◎斯の親にして斯の子あり 南條文雄
◎如何にして信心を得べきか 伊藤證信
◎信仰問答 橋川德龍
▲讀者
◎慈母の愛 滋賀鉄腸
◎家庭雜感 近江よしを
▲詞藻
◎白風帖 太郎
◎知歌 菊山たか子
▲報導
◎編輯だより◎內報◎外報◎はがき集◎新刊紹介

發行所 東京巢鴨二二一五五 家庭社

無盡燈

十月一日發行一部金十錢
第八卷 第十號
割引一年前金一圓郵税共

▲研究▼
◎大小乘涅槃經概論　長島徹映
◎科學と宗教との調和に就て再び朝永先生に教を乞ふ　伊藤古川
◎予が無量壽佛の淨土觀　中村諦梁
◎老子哲學　安藤州一

▲修養▼
◎清閑の一道　住田智見

▲雜纂▼
◎龍樹世親優劣の批判　舟橋水哉
◎事々無碍と淨土門　藤原惠寛
◎三たび梵文阿彌陀經に就て質疑に答ふ　南條文雄

▲時論▼
◎無價値論と成功主義（青川）◎修學の本義◎日宗第一區中檀林學生の檄◎新平民僧の要求（筑川）◎日蓮宗徒に寄す（氷嶺）◎『御文』に顯はれたる信條と現代の宗義學者（台坊）

▲附錄▼
◎梵文法華經和譯　南條文雄

○本誌は一宗一派の機關に非ず、通佛教の地盤に立ちて、活動社會の指導者たらむと期す、見よ見よ、不偏不黨教界之指針

東亞之光

定價壹部郵税共金五錢
第九號九月拾五日發行
毎月壹回（拾五日）發行
東京市神田區南乘物町拾三番地
發行所　舍身庵

見よ（九月廿五日より發賣）見よ

○眞宗大谷派壹等學師小栗栖香頂老師序
○天台宗大僧正櫻木谷慈薫國師題字
○天台宗大僧正故奥田貫昭國師序文
○禪臨濟宗專門道場主渡邊南隱禪師書簡序文
○故江馬春熙老國手

板垣伯對舍身居士政教問答

全壹冊　正價金拾五錢
頁數百五十、送料金貳錢

本書は明治の活維摩を以つて任ずる舍身居士が時の内務大臣板垣老伯と會して、時事に關聯する政教の大問題に就き論辯往復せし活筆記なり。今や東洋の時局益々切迫して、本書に載する所の益々適切なるを感ずる者あり、活佛教の本領を知らむとする世の政治家、佛教を世と一致活動せしむ可き要點を知らむとする佛教家等各々一本を座右に供して可なり。

東京市神田區南乘物町拾番地
發行所　舍身庵

全國一手大賣捌所
東京市京橋區銀座四丁目
東海堂

佐々木月樵先生著

實驗之宗教

菊判三百頁
定價五十錢
十月十五日發行

宇宙の大靈、宗教的偉人の人格となつて世に顯はるゝ天の紅霓の如くそれ美也。我等この美に接して大靈の懷に入る。快何ぞ極まらんや。

人格の感化は、大靈の活ける攝取也。著者自己心中の煩悶を醫し、大安住の地を得んとして焦慮する多年。時に傳教に行き、弘法に行き、源信に行き、妙惠に行き、道元に行き、法然に行き、日蓮に行き親鸞に行き、蓮如に行き、白隱に行き、各々其異なれる人格の上に光れる宇宙の靈氣に接し、こゝに微なりと雖ども、自己の信念なるものを得たり。宗教の確立を見るに至れり。

本書はカーライルの『英雄論』に似たり、エマーソンの『代表的人物論』に似たり、而して本書は之に同せず。その同ぜざるの趣は讀んで明了ならむ。要するに本書は著者が人格の感化をうけたる實感の記載也。故に崇高なる人格に接して信念を得、修養に資せんと欲する人は是非一讀せざるべからざるの書也。

而して本書には傳教、弘法、源信、妙惠、道元、法然、日蓮、親鸞、蓮如、白隱の詳傳を併せ錄せり。故に佛教高僧の傳紀を知らんと欲する讀者には多大の益を與へんかな。

東京本郷四丁目
發行所　文明堂

規定

一、本誌は毎月一回（八日）發行とす
一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事
　但郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事
一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所通知する事
一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全國
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	無遞送料

◎廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛教徒同盟會出版部」とせらるべし

明治三十六年十月七日印刷
明治三十六年十月八日發行

發行兼編輯人　百目木智璉
印刷人　白土幸力
東京市本郷森川町一番地
發行所　大日本佛教徒同盟會出版部
（電話下谷二四三二）
東京市神田神保町
大賣捌所　東京堂
同　本郷四丁目　文明堂

前號要目

予の見たる社會主義　〈吉田學士〉
續靜觀錄　〈近角學士〉
無名の求法傳道者　〈社說〉
比丘の自殺　〈常盤學士〉

政教時報第百五號
明治三十一年十二月廿六日遞信省第三種郵便物認可
明治三十六年十月八日發行　（毎月一回八日發行）
（東京市神田區英士代町二丁目三光堂製版印刷）